

立志

吾々はこの説によつて、凡ての醫藥は無用であるとは云はない。然し、かなり多くの場合に醫藥が無用であることは、吾々の度々實驗する處で、ルーソーの言の詐りでない證據となるのである。元より人間の肉體は一時健康を害はれても、そのまゝ自然に治療する傾向のあるものである。だから醫藥は効なくとも、醫藥が害なければ自然に病氣は直るものであるのを思へば、こゝに醫藥の効用はないとも云はれるのである。だから醫藥にのみ信賴するのは、當らないのである。

又滋養に就ても世には菜食を主張し、肉食を全廢するものがあり、又肉食を主とし、菜食主義者を解らずやと嘲笑するものもある。けれども之は共に極端に走つたので弊害は同じである。要は滋養の如何にあるのである。

けれども食物は必ずしも滋養物のみを取らねばならぬと云ふ事はない。随分粗食で健全な人があり、美食で不健全の人がある。然し何れかと云へば、美食をし滋養分を攝取するにこした事はないのであるが、要は消化の如何にあるのである。

完全なる健康

立志

今日の醫師の言を聞くに、労働社會の者は平常營養は極めて不十分であるにも拘らず、病に堪へる力は多く、創などの直ることは速である。之に反して金衣玉食の貴公子、或は學者、學生等はかなりの美食をしながら、常にその虚弱に苦しむもの多いと云ふ。之は疑もなく、労働者は粗食だけれども、労働して身體を使ふから消化がよくて、身體の養ひとなるのである。之に反して中流以上の輩で美食する割合に健康の保たれないのは、消化不良であるからである。かゝる人々は之より美食を排

するに及ばないが、更に運動の必要があるのである。

以上に述べた五つの要素、道德運動滋養休息薬用、健康を保持する所以の必須の道である、之が完全圓滿に行はれば、長壽は疑ひないのである。労働と云ひ耐忍と云ひ精力主義と云ふも總て身體の健康によつてなし遂げられるものであるのを思はねばならぬ。然して之を思へば如何に健康が人生に主要なものであるか、領解されるであらう西洋の學者の言に、「人の生命には長さもあれば又幅もあり厚さもあり」と云ふことがあるが、

完全なる健康

立志

人生は只長いばかりが能ではない。幅と厚さを大にするこ
 と——即ち人がこの世に處しては偉大な仕事を多量になし遂げ
 る工夫が肝要であるのである。吾々が健康論を力説したのも、
 この生命の厚さと幅とを擴大にしたい爲である。健康であつて
 始めて道德も完備し、偉大な事業もなし遂げる力が備へられる
 ので、その力を以て、上に力説した總ての用意を身に帯び、そ
 してこの人生に健闘したなら、成功は必ず期して待つべきであ
 る。(終)

附 録

現代名士逸話

現代名士の逸話

■ 賸物と間違はれたる學堂氏

革新俱樂部の領袖として、當代政界の麒麟兒とたゞへられて居る尾崎行雄氏が、其の昔、其年わづかに十八歳で新潟新聞の主筆として招聘された時に、東京を出發して新潟驛に着くと、ブラットホームに新主筆を待ち設けてゐた新潟市の歡迎委員は、豫て到着の知らせのあつた時刻に至つても、主筆先生と覺ばしい御面相の人物が出

て来ない、何うした譯かと思ふ中に、稍々あつて年若な書生ツポ上りの人物がツカ〜と歓迎員の前に現はれて、

『私は尾崎です………』

と挨拶したが、打ち群がつてゐた歓迎員は誰一人として、これが新主筆先生とは信じなかつた、のみならず、新主筆先生の書生かと思つて、

『尾崎先生は未だお出でになりませぬか。』

と聞きたゞすので、流石の新主筆も聊か面喰つて、

『僕が尾崎行雄です！』

と瞭然と答へたが、未だ誰とて之を信する者が無かつた、彼是ど押問答の末、いよく贗物でないと云ふ鑑定が附いたから、一同は極まり悪るげに、

『實は今日は生憎御存じの某君が差支があつて、此處に参りませぬので誠に失敬いたしました、何卒爾來御懇切に………』

と初對面の儀式は濟むだが、之等の歓迎員は心の中で、窃かに、

『なんだ、馬鹿々々しい！ 人も有らうに某君も某君だ！ 恁んなへナチヨコな書生ツぽを招聘して何うする氣だ？』

と下げすんでゐたが、豈圖らむや、此のへナチヨコと下げすまれ

た新主筆先生の怪氣焰は容易に當る可からざるの氣慨があつて、從横無盡の筆を揮つて政事を論じ、官民懇親會の席上に出でては藥罐頭の縣令閣下に議論を吹きかけて之を諷刺し、其の縣會の書記長を囑托された時には、議事録に破天荒の評論を加はへて、愚論驚くべしとか、奎兵衛田吾作議員の醜論聞くに堪えずと言つた様な批評を加はへるのであつた。

爾來風雨幾年の後、此の主筆先生が政界の風雲を叱咤して、政戦三十年、いよいよ今日の地歩を占むるを見るに及むで、新潟の故老は口々に、

『小さくつても針は飲めない！ 尾崎はヘナチヨコと下げすんだ時代から違つてゐた所がある！』
と噂して居る。

難破船長と綽名されたる木堂氏

學堂尾崎行雄氏と並べて憲政擁護の守本尊とたゞへらるゝ木堂犬養毅氏が、曾て大阪地方に出懸けた時に、政友と共に或る樓上に懇親會を催すると、席上に現はれた關西の名花と囃さるゝ或る一藝者が、誰れ彼どなく席上の名士を捉らへて身の上の判断を下だして、

廻りくつて席上の第一政客たる氏の御面相をシゲくつて見守つて氏に向ひて、

『あなたは難破船の船長さんの御面相です！』

と遣つて除けたのには、一座は言ふに及ばず、流石の木堂氏も哄笑を禁じ得なかつたと云ふ事だ。

■江原素六翁の毀はれた標札

排日案の影響で、此度渡米した江原素六氏は既に古稀の齡に達したるに拘らず、未だ嘗て病氣にかゝつて藥を用ゐた事が無いと云ふ

頗る健康な身體、夜は十時に寝ねて、夏は四時、冬は五時に起きて酒煙草は一切禁物で、娛樂は植木ぐらゐのもので、唯一の樂は讀書三昧に耽るといふ人物である、従つて其の性質も亦質朴で、其の瀬戸焼の門標は近所の子供の惡戯の結果か何か解らないが、兎も角、素六の六の字が毀はれて居るが、一向に構はないで其儘にして居るスルト、或る懇意な知人が此の標札を見て。

「あれでは如何にも酷い！ 別に大した費用の懸る譯でないから一つ取り換へては何うだ？」

と勧めるど、江原さんは濟まし切つて。

『なにあれで澤山だ！ 下の方が壊はれて居るのは、片足を棺桶

に突き込むで居る表示だ！』

笑つて、一向に取り合はなかつたといふ事だ、麻布の一寺院に江原さんの寓居を訪ふものは、何れも之が貴族院議員たる人の寓居かと思つて、其の質素恬淡の生活に驚くといふ事だ。

大谷翁の鋭敏な鼻端鑑定

製茶貿易で有名な、横濱の大谷嘉兵衛氏の鼻先鑑定と來たら素敵なもので、チヨイと茶の香を嗅いだ丈でも、美事に其の産地を言ひ當

てるといふ程に、茶に對する鑑識と辨別力とが自由自在に出来ること云ふ魔力がある、或時、横濱にいかさま者があつて、諸所の茶を色々どコキ交せて、一儲しやうと巧らむで、鑑定力のない茶業家を無暗矢鱈にペテンに懸け廻してゐたが、何うしても大谷氏だけは欺ます事が出来ないで、

『大谷さんの鼻には降参つかまつる、はな／＼以ての外の鼻で御座る！』

と零してゐたと云ふ事だ、流石は横濱開港以來五十餘年の久しき茶に對する熱心なる趣味と研究とは、氏に非常なる鑑定力を養成し

たものと見える。

■田中子爵のシケ込み怪焰

子爵田中阿歌麻呂氏は、海洋學研究では有名な學者で、水産講習所や、其の他に教鞭を執れる極めて平民的の若様だ、所がツヒ先頃或る理學博士と共に東京灣の海洋調査の爲に觀音崎沖に出懸けると其の汽船が沖合で、圖らずも暴風と激浪とに翻弄されたので、二人は何れもシケ込むで、調査もソツち除けで引き返へして仕舞つた、スルト、田中さんの洒落が面白い。

『海洋學なんて、決して自分で踏査すべきもので無い！ 宜しく何人かに踏査させた材料を基礎として、テーブルの上で靜かに研究するに限る哩』

■田尻博士の滑稽的説明

無味乾燥な數字でも統計でも一たび法學博士田尻稻次郎氏の舌頭に上ると、極めて面白いものと成つて來る、或る講演で。

『我國は豊草原の瑞穂の國と昔から稱へられて居るが、今日は貧草原の缺穂の國じや、御覽なさい！ 毎年出來る米は國民の需』

用を充たす事が出来ないで、此の十五年來は、多い時にはおよそ六千萬圓、少い時でもおよそ六百萬圓を輸入して居る、此の外麥も足らねば、豆も三百萬石ぐらゐしか出来ない、味噌や、醤油に不自由するのは之でも解かるのみならず。人間は一度砂糖を甜めると、其味を忘れないから次第に多く甜めたくなる、其の結果として一年間に三十六萬噸の砂糖を輸入して居る、三十六萬噸と言へば大したものだ、昔から三寸の舌といふが、此の舌幅を一寸づゝと假定して、日本國民五千二百萬人を乗ずると、箸棒にデツかい舌となるから、三十六萬噸を甜める位はお

茶飯前の仕事だ！

と語つたので、満場の聴衆は輕妙極まる譬喩にチャームされて仕舞つたと云ふ事だ。

■早川鐵治氏のド偉い氣焔

いさゝか旋毛は曲つてゐるが、常に垢ぬけのした議論を吐いて、人をして首肯せしむる頑鐵將軍、まこと本名は早川鐵治氏、先頃。「むかしは身分のある士族すら月に二度ぐらゐしか魚は食はなかつたものだが、此節はイヤハヤ呆れ返つて仕舞ふ！ 百姓が白

いお米を喰つて、人足や、立ん坊が一本三錢五厘のバナ、を横喰へにして居る、米が高くて困るも無いもんだ、陸海軍や銀行會社などが外國の眞似をして、大規模の擴張をするも善いが、少しは翻つて日本の富の程度も考へて貰ひ度いものだ、天下の名士たる早川鐵治が、斯様な壁の破れた吹けば飛ぶやうな事務所を持つて居る有様じゃあないか』

と氣焔を吹き立てたので、之を聞いた人物はいさゝか痛快な氣焔にあてられて罷り下がった。

床次氏の徒歩主義

鐵道院の總裁たる床次竹次郎氏の質朴な生活振は有名なもので、嘗て東京府の參事官であつた時に、各課長づきの常用人力車を見てこれは贅澤極まるといふ所から斷然と廢さして仕舞つた位だから、前年内務次官の時にも、多くはお極まりの徒歩主義で、内務省の退出時には、同省からテクノと神保町あたりまで歩いて、其れから電車に乗つて、市ヶ谷見附に下りて、牛込藥王寺の自邸にサツサと歸るのが常であつた、一事が萬事、恁ういふ筆鋒であるから新たに

鐵道院總裁てつだういんそうざいに成なつて、同院どういんに出仕しゅつしするにも其その風采ふうさいに頓着とんちやくしないで、中折帽子なかをればぼうしを冠かぶつて入はいつて往ゆくと、最初さいしよは門衛もんゑいも新總裁しんそうざいとは知しらず、

『一寸ちよつとお待ちまちなさい！ 何處どこに往ゆきます？』

と誰何すゐかしたといふ事こともあつた。

三宅博士のお愛嬌あいけうぶり

トツ／＼の雄辯家ゆうべんか、三宅雄二郎先生みやけゆうじろうせんせいで、昨年衆議院議員さくねんしゅうぎいんぎの總選舉そうせんきよの節せつに、古島一雄氏こじまかずをしの應援演說おうえんえんせつといふので、淺草あさくさで演說會えんせつかいを開ひらいた時ときに演壇えんだんに現あらはれて、

『由來ゆらい此區このくは極端きよくたんに善よいものと、極端きよくたんに悪わるいものを出いだして居をる、幡隨院長兵衛ばんずゐんちやうべゑは前者ぜんしやで、鼠小僧ねずみこぞうは後こうしや者ものである、今日古島一雄氏こんにちこじまかずをしを選出せんしゅつしやうとするのは、また前者ぜんしやに屬ぞくする者ものである』

と、例れいの雄辯ゆうべんで論ろんじ去さると頗すこぶる大喝采たいかつさいを博はくして、古島派こじまはの氣勢きせいが益々ますます揚あがつたと云いふ事ことだ。

岡崎邦輔氏のお眼鏡めがね違ちがひ

政界せいがいの一角かくに知しられて居をる岡崎邦輔氏おかざきくにすけしは、故陸奥宗光伯こむつむねみつはくとは親戚しんせきの間あひだで、其昔内田康哉氏そのむかしうちたかうさいしと原敬氏はらけいしとが陸奥むつの秘書官ひしやくわんをしてゐた頃ころに

岡崎氏は陸奥邸で此の二人者と頗る懇意に成つて来た、當時岡崎氏の考へでは、二人の將來を豫想して、内田氏の將來は立派な大政治家となり、原氏の將來は無二の事務官となると思つてゐたが、後年に於ける二氏の行方は違つて来たから、此頃岡崎氏は人に向つて。

『曩には大政治家の質があると思つてゐた内田が物に成らず、好事務家として發展すると思つて居た原が大臣たるの貫目を十分に備へて居るから、實に世の中は解らないものだ』
と語つたといふ事だ、さてく六ヶ敷きは人物の鑑定で御座る。

久原京大學長の悪戯

京都の理科大学長の久原躬弦氏が、其の青年時代に何か悪戯をして警察に一寸と來いを仰せ付かつて、

『一體お前の姓名は……』
と尋ねられると。

『僕はくふはらみつると申します！』

と答へた、喰ふ腹、満つるとは、如何にも變だと思つて、査公は不機嫌斜ならず、

『喰ふ腹みつるとは何事だ、一體貴様は本官を侮辱して居る、眞の姓名を語らなければ本官にも覺悟があるぞ！』
 と氣色ばむで怒鳴り付けると、くふはらさんは愛嬌タラ〜と、
 『だって久原躬弦といふのだから仕方がないぢやありませんか、
 つい喉が詰まつたものですから、久の字を長く引ツ張つたから
 變に聞えたのでせう！』
 と語ると、其の查公は苦笑を禁じ得なかつた。

■神保博士の先輩罵倒論

眞面目の滑稽、さては、鹿爪らしい皮肉を語つて時々聴者を笑は
 せる理學博士の神保小虎氏、ツイ此頃歸朝して、

『此度の旅行には尠からず困まつた、其の一例を擧げると、君達
 は切符さへ買つたら汽車に乗れると思ふだらうが、唐天竺の事
 はなか〜、然うは往かないのだ、歐米の汽車ちゆう者は大抵は
 座席券といふものが別に必要なのだ、然うかと思ふと、同じ列
 車でありながら、此方の部屋は其れがなくとも濟むと云ふのが
 有るのだから、何がなんだか我々赤毛布には薩張り解らない、
 昨年の出發前に先輩が少し注意して呉れたら、ドギマギする事

は尠なかつた筈だが、何うも先輩の不親切には困まる、チツとも教へて呉れないのだもので、で、僕は椽大の筆を揮つて、「赤毛布式失策を惹起する點より見たる先輩不親切論」といふ一大傑作を草して見たい!』

と語つたと云ふ、優しい顔をして博士はなか／＼面白い事を言はつしやる。

■水町氏強盗と間違へらる

財界に其人ありと知られたる水町袈裟六氏の大學時代は苦學しつ

つも秀才とたゞへられて、いはゆる奮闘をしたものであつた、斯くて、其の卒業後、間もなく上州の友人の宅に假寓して翻譯などを遣つて、其の原稿料で本を購ひながら相變らず苦學を遣つてゐた頃、ある日に妙義山に遊ぶで其の歸りがけに圖らず夕立に出逢つて、破れ菰を冠つて只走りに歸る途中で、當時有名な或る強盗と間違へられて巡査に酷く咎められた事がある。

■本多所長の碁盤道樂

西ヶ原の東京蠶業講習所に長たる本多岩次郎氏は、其の専門以外

の道樂は圍碁で、これまで美事な碁盤八面を有してゐたのが先頃また新たに一面を買ひ入れて、キツちり九面と成つたと云ふので、客に向つて。

『さあ！ 碁盤は九面と成つた！ 將來は必定よい工面が出るに

相違ないぞ！』

と語つたが、サテ事實は何んなもので御座らう。

■ 焼芋買を睨まれた阪田氏

豊國銀行の阪田實氏が、慶應義塾に御座つた頃は、御多分に漏れ

ず、牛飲馬食黨の一人で、其頃學生仲間で、焼芋の會食が流行したスルト、或日抽籤の結果で氏の焼芋買といふ任務を仰せ付かつて、矢庭に焼芋屋に往つて、ホヤ／＼をシタ、か買ひ込むで、袂に入れ、テク／＼と義塾の坂を上りかけると、南無三寶、恰も福澤翁に出會はした、翁はシゲ／＼と阪田を凝視つて、唇頭に微笑を湛へながら、

『阪田！ 阪田！ 袂が火事だ！』

と皮肉つたので、流石の豪傑も聊か面喰つて、狐鼠々々と寄宿舎に歸り翁に冷かされた由を語つて、焼芋を頬張りながら。

『先生に見られたから、何んだか今日の芋は拙いやうだ!』
と喋りながらも大方平らげて仕舞つたさうだ。

■ 高橋男の妙な御變名

目下大藏大臣として世に時めき給ふ高橋是清氏が、明治の初年米
國から歸つて英語の教授をしてゐた頃、或る待合に陣取つて兎角學
校は缺席勝で御座つたが、其頃友人知己に一時どうした譯か見放さ
れて、都落をして遙々九州三界、然かも肥前の唐津に英語教師とし
て赴任したが、さて誠本名では東京での行掛上チト面白くないと

いふ所から、吾妻太郎といふ豪氣な名で西下する幕と成つた、スル
ト、當時唐津の英語教師に氏を推薦した一友人は痛く此の變名にホ
レ込むで。

『流石は高橋だ! 腐つても鯛ぢや、吾妻は關東だ! 一時都落
をすするにしても、雄壯の氣象は消えないで、關東唯一の旗頭を
以て自任する氣概がある!』

と、ホク／＼興に入つてゐたが、何ぞ圖らむ、御本人が吾妻太郎
と變名したのは、其様な念入な命名でなく、今まで流連してゐた待
合の吾妻屋に因むで斯くは名づけたものであつたさうだ、斯くて唐

津に出懸けて二年許も教授してゐた、當時の學生には天野爲之、辰野金吾などの面々があつた。

■石川博士の演説振は速射砲

理學博士石川千代松氏のお口のお早い事と言つたら、野呂間の圖部六には逆も聞き取れるもので無い、何日ぞや、神田の和強學堂で例の進化論の講演を豎板に水の如く、滔々ど一氣呵成に説き去り説き來つて、一點の淀みが無かつたが、さて聽衆の方では呆氣に取られて息を殺して聞き取らうとしたが、餘りの速射砲で容易に受け止

め兼ねて居る中に講演が濟むで、博士はニコ／＼顔で。

『諸君！ 只今の演説はお解りに成らなかつたでせう！』

と遣つたので、流石満場の聽衆は一時にドツと笑ひ崩れて仕舞つた。

■和田豊治氏の大々的健啖

富士紡の敏腕家の和田豊治氏が其昔慶應義塾の學生であつた頃は非常の健啖家で、數人の友人と共に新橋から札の辻までの蕎麥屋といふ蕎麥屋は片ツ端から食つて歩いたといふ奇談を傳へて居る、さ

れば、氏が今日でも實業界の大食官を以て知られて居るのは、當時胃袋を非常に擴張した結果だと蔭口をたゝく者がある。

■前田行脚翁の大喝一聲

前田行脚の名を以て有名なる前の農商務次官、さては五二會々頭今の貴族院議員前田正名翁は、歐米と日本との往復は極めて手輕な旅行で、常に産業視察の爲に席暖かなるに違なしといふ状況である先年歐洲から歸朝後に間もなく北海道を旅行して居ると、一巡查が胡亂な奴と見て取つて、彼れ是れと聞きたゞすから、翁は例の調子

で。

『貴族院議員從三位前田正名を知らないかッ？』

と一喝したので、查公は之が産業界の貢献者、殊に北海の産業發達に盡力せる前田翁其人と氣付いたものか、膽を冷して仕舞つた。

■小野金六氏の迷信打破

甲斐絹の御本元たる甲州は今日でこそ一般に養蠶業が盛んに行はれて居るが、數十年前までは東部地方の盛んに行はれたるにかゝはらず、西部の葦崎地方では誰とて之を行ふものがなかつた、其曰く

を聞くと、斐崎地方では養蠶をすると神様の祟があるといふ迷信が行はれてゐたからである、さるに、其頃小野金六氏は未だ一青年であつたが、斯かる迷信の爲に望の多い養蠶事業を起さないので、實に怪しからぬ事と思つて、信州から桑苗を數萬株も買ひ込むで、其處彼處に植えて、郷里の人達にも栽え付ける事を勧めたが、誰一人として小野の言ふ事を聞く者が無い、のみならず、小野の此の新事業に妨害を試むるものすらあつた。

搗て、加へて、不幸にも打續く旱魃に桑苗は見る／＼其勢を失つて仕舞つたので、村民は之を見て。

『其れ見た事か、金六さん！』

全く神様のお祟で、彼様な酷い目に會つたのだ！』

と語り合つて口々に冷評してゐたが、氏は一策を案じて、雨乞する事が數日に及ぶと、有意か無意か、兎に角、一天俄かに搔き曇つて大に雨降り、一時は枯れたと思つてゐた桑苗が見る／＼生々として來て、遂に養蠶の有利なる事が解つて來たので、さきに冷笑した連中は目を覺まして。

『あの向きなら罰は當らない！』

と言つて、盛んに養蠶を遣るやうに成つたといふ事である、今日

蕪崎地方にも該業の盛んに成つて來たのは、實に氏の力が與つて多
いと云ふ事だ。

■床次氏の飛むだお怪我

目下鐵道院總裁として敏腕の聞えある床次竹次郎氏が、先頃内務
次官時代に參禪に遠ざかつて荐りに流行の靜座式呼吸をやつて居る
と、身體中が搖ぎ出したさうで、いつぞやも椽側で一心不亂にやつ
てゐた間に、フト椽側から轉げ落ちて怪我をして、これが爲に三月
間も缺勤したと云ふ事だ。

■本庄將軍と勳四等の瑞寶章

陸軍少將の本庄道三氏は極めて硬直の御人物で、眼中さらに藩閥
とか何とか言ふ様な七面倒な城壁は無い、従つて陸軍には比較的縁
故の薄い徳島縣出身なるに拘らず、處きらはず、侃々諤々の議論を
やるので、上官の氣受は甚だ宜しくない、少將でありながら僅に勳
四等の瑞寶章を貰つたきり外に何も無いが、氏は平氣千萬で。

『陸軍で、我輩を少將にまで進めて呉れたのは、寧ろ不思議千萬
だ！』

と語ると云ふ風で、嘗て氏が砲兵工廠にゐた頃には、流石袖の下運動に堪能な御用商人すら、氏には匙を投げて。

『彼の人ばかりは横杆でも棒でも動くものではない！』
と零してゐたさうだ。

■肝付將軍と錫の狂歌

海軍中將、大阪市長と云ふ肩書を有する肝付兼行氏また一面には熱心なる錫貿易の奨励論者で、かつて。

『錫をドシ〜支那に輸出すると、一ケ年に確かに一億圓には成

る！』

と語り、先日も或る席上で、將來の貿易品で、何が有望かと云ふ話の出た時に、氏は。

烏賊の長手を延べるだけ延ばし

つかみ取りたい支那の富

と云ふ即興を口吟むで一座を笑はせた。

■黒田畫伯禿頭を悲觀す

洋畫界の泰斗、黒田清輝氏、お年は未だ四十代の男盛りなるに拘

らず、其頭が禿げてゐるので、何うしても年よりは餘程多く見られる、何日ぞや、箱根に遊ぶで、或る尼寺に立ち寄ると、六十近い尼さんが出て来て、四方八方の話の末に氏を見ながら。

「御隠居さんは、最うお幾つにお成りです？」

と、宛然七八十の老人の様に挨拶されて以來、氏はひどく悲觀して居る。

■金原翁の揮毫料數萬圓

天龍川の土木事業と、殖林と、且つは、勤儉主義とで、有名なる

金原明善翁が、各地方に勤儉の遊説に歩くごとに、地方民の望に應じて揮毫した謝禮が、驚く勿れ、積りくつて既に二萬圓の多額に達したと云ふ事である、翁は嘗て人に向つて。

『當節の人は上にピカ／＼した着物ばかり引ッ掛けて、實力を養はないから困る、鑛金は剥げるが眞金は剥げ無い！ 縦令少さくてつも眞金の人が欲しい！』
と語つた流石は勤儉翁の面影が偲ばれる話だ。

■海老名氏と嫌な澤庵漬

基督教界の名士、海老名彈正氏の少青年時代は、其の家庭で厳格な武士的の教育を受けたもので、父君は氏の將來を思ふて、決して愛情に囚はれて、其の教育方針を曲げるといふ事をしなかつた。其の一例を挙げると、氏が子供の時には、香物が嫌であつたが、父君は決して之が嫌では濟まさず、朝飯には是非これを食べさせやうとしたが、嫌いなものは逆も食ふ譯に往かないから、母君が他の野菜を食べさせやうとすると、父君が之を許さないから、氏は毎朝食鹽を副食として五ヶ年間の久しき間も續けたといふ事である、流石父君も鹽まで追窮せられなかつたさうだ。

適中せる高島翁の判断

易學に精通せる横濱實業界の紳士高島嘉右衛門翁が、例年の例に倣つて明治四十四年の冬至にも、齋戒沐浴して三十餘ヶ條の題目を設けて、翌年間の種々の易斷を遣つて居る中に桂公の易斷に塞の一字を得て、今年一年は桂公に取つては身動きするのが大凶であると判断した。

處が翌年に桂公の外國漫遊の事が發表になると、翁は。
『此旅は公に取つては非常に悪い！無理に出懸けて往つても、

『目的を達しないて途中から引き返へす象である』
 と豫言した、スルト、其れが適中したので、流石は日本一の斯道の大家だけはあると皆々が驚いて感じ入つたと云ふ事である。

■前田子爵の御風流

貴族院議員、子爵前田利定氏は、極めて風流の才子で、三十一文字のスラ／＼と口に任かせて出づる所から、折に觸れ興に乗じて口吟むだ句は頗る多い、嘗て飛行機の歌として。
 見る人の、頭の上を、輪をかきまて

飛行機舞へり、すみれ咲く野を

初夏の、風をよる吹く、武蔵野の

瑠璃なす空を、ブレリオの飛ぶ

と詠むだ、又、議院雑詠には

カーテンに、春の日うらゝ、事もなく

豫算の諸案、通過し終んぬ

委員会、未だ終らず、一道の

燈光もるゝ。春の宵かな

といふ様なものがある。

■福原次官の御愛嬌

文部次官の福原録次郎氏、時々面白い事を言つて人を笑はせる、先日せんじつも

「大臣だいじんが代りやうが、内閣ないかくが潰れやうが、そんな事ことは我輩陣笠わがはいちんがさには關來くわんけいがない、自分じぶんが文部もんぶに出仕しゅつしして以來いらい、大臣だいじんの代かはる事こと十餘回じゆわい、然しかも松田文相まつたぶんしやうの顔かほは一度いちども見みた事ことが無ない」

■松村博士の昆蟲採集ぶり

宗教界しゆうけうかいの奇男兒きだんし、松村介石まつむらかいせきし氏の令弟れいていとして、理學博士りがくはかせとして知られたる松村松年まつむらしやうねん氏は、昆蟲學こんちゆうがくでは日本にほん一の評判ひやうばんがある、氏が昆蟲こんちゆうの採集さいしゆに出懸でかける際さいには極きはめて輕便けいべんな扮装でんちで、一本ほんの洋杖ステッキを打ち振りふりながら往ゆくと云いふ有様ありさまであるから、之これを見みるものは。

「あゝいふ扮装いでたちで何どうして昆蟲こんちゆうなぞ捕とれるものか、昆蟲こんちゆうを捕とるのなら相應さうおうの準備じゆんびをしなければ成ならぬが、一體たいどうして捕とるつもりなのだらう？」

と怪あやしむで居ゐると、さて氏しはいよく昆蟲採集こんちゆうさいしゆに着手ちやくしゆすると、其その洋服やうふくの下したから二枚折まいせりにして胴どうに巻まきつけた網あみと、軍人ぐんじんの彈藥入だんやくいれのや

うに成つて居る採集函さいしゅぼことを取り出だして、機敏きびんに採集する早業はやわざが實じつに不可思議ふかしぎの腕前うでまへで、蝶てふなどの様な羽やうの傷いたむものは之これをピンで止とめて帽子ぼうしに挿さすといふ風ふうであるさうな。

■ 青山博士の權突けんつ

醫學博士い がく は か せの青山胤通あをやま りん づう し氏は、直覺力ちよくかくりよくとに富とむで患者くわんじやの容體ようたいをチラと見ただけでも、其その病氣びやうきを判斷はんだんして、然しかも、其それがキチンと中あたると云いふ程ほどである。

のみならず、氏は金満家きんまんかだらうが、勢力家せいりよくかだらうが其様そんな事ことには

一向かうに頓着どんちやくなく、只管ひたすら其そのの職分しよくぶんを忠實ちゆうじつに盡つくす事ことに力つとめて居をるさうだ、嘗かつて或ある富豪ふがうで博士はかせを迎むかへた時ときに、家人かじんが如何いかにも解わかつたらしい顔かほ付つきで。

『先生實せんせいじつは少し胃病ゐひやうの氣味きみで……………』

と追従つゐせうだらうに並ならべ立たてると、博士はかせは直たちに

『お前まへに病氣びやうきの事ことが判わかるものか』

と權突けんつを喰くはしたので、家人かじんは頭あたまを搔かいてギヤフンと參まらされたといふ事ことだ。

■ 頭山満氏と無言の教

頭山満氏が玄洋社の社長をして幾多の塾生を養つてゐた頃に、安藤なにかしと云ふ塾生が大に自然主義を遣つて毎晩に耽溺するので幾ら友人が意見を加へても一向に聞き入れない、でも社長だけは恐いものと見えて何時も朝は早く歸つて、一茶の所謂『浮かれ猫素知らぬ顔で歸りけり』を極め込むでゐた。

しかし、頭山社長は早くから安藤の平生の素振の怪しきを睨むでゐたから、或朝安藤が歸つて來る途中に待ち受けをして、ヒヨイと

安藤の前に立つた。

安藤は一目見て膽を潰ぶして、物も得言はず、首を垂れて立往生して居ると、稍あつて何か首筋に冷やかなものが觸れた、頭山社長の去つた後に手に取つてシゲく〜と見ると珠數であつた、流石安藤も權威ある社長の教訓に漸く覺醒して爾來打つて變はつた人間と成つた。

■ 福原次官の洒落ごと

文部次官福原隼次郎氏は、頓んと風采態度などには御頓着の無い

が、其の演説の馬鹿に長い事は驚く可き程で、最うお仕舞かど聴衆か欠伸を噛み殺して聞いて居ると氏は臆て

『終に臨むで尙一言す可き事があります………!』

と唸り出す、そこで、

聴衆は扱はいよく

千秋樂と思つて居ると

終に臨むで

からの一語から説き出だす文句は中々に止まない、聴衆

いよく倦むで此處からも彼處からも欠伸を連發して、中には

『いや、藏原さんの終に臨むでと豫約以後の口上は却つて長い、

あ、往生際が悪くツては困る!』

と蔭口をたたく者があつたが、此度の新政黨に馳せ参じた陣笠振

を見て口々に

『終に臨むでは終に臨むで變な事に成つた!』

と非難してゐた、氏の面白い逸話は之のみに止まらない、氏が十

餘年前に熊本の英語學校の教師をしてゐた頃に、或時修辭法の輕む

すべからざるを説くに及むで。

『たとへば山は高く水は流るといふのみでは、一向に人の美感を

惹起さしめない、されど、山は巖々として聳え水は………!』

と力味むだが、次の句が續かず生憎停電して仕舞つたので氏は大

にへこたれて、頭から湯氣を立たせながらヤツと考へ付いて。

蠻カラー黨の一人で、其の次官に昇進した時に或る地方の新聞記者が恭々しく。

「新次官は教育方針を如何に執らせらるゝか？」

と鹿爪らしく訪問すると、氏は

「次官の教育方針と言つたら、先づ大臣の命令を聞いて之を遵守するものですかナ……」

と奇抜の答へをしたので、地方新聞記者もへこたれてお去らばを遣つたと云ふ事がある、のみならず、氏の無邪氣の口から折に觸れて奇抜な言を聞く事が多い、何時ぞやも。

「僕は之で二十三貫半もあるのだから、體量から行けば差し當り大臣の格だが、情けない事には地金が鉛と來て居るから仕方が無い！」

と語つて、人を笑はせた事がある、さて〜罪の無い次官殿かな

■藏原代議士の極まり文句

今は立憲同志會と云ふ新政黨に馳せ參じたが、一時は江戸ッ兒肌の人々に謳歌されてゐた藏原惟廓氏が、一と頃賣り出さうとする頃に、政壇に立つて滔々と演説する時の勢は誠に元氣なものであつた

が、其の演説の馬鹿に長い事は驚く可き程で、最うお仕舞かど聴衆が欠伸を噛み殺して聞いて居ると氏は臆て

『終に臨むで尙一言す可き事があります……！』

と唸り出す、そこで、聴衆は扱はいよいよ千秋樂と思つて居ると

終に臨むでからの一語から説き出だす文句は中々に止まない、聴衆

いよいよ倦むで此處からも彼處からも欠伸を連發して、中には

『いや、藏原さんの終に臨むでと豫約以後の口上は却つて長い、

あゝ往生際が悪くツては困る！』

と陰口をたゝく者があつたが、此度の新政黨に馳せ参じた陣笠振

を見て口々に

『終に臨むでは終に臨むで變な事に成つた！』

と非難してゐた、氏の面白い逸話は之のみに止まらない、氏が十

餘年前に熊本の英語學校の教師をしてゐた頃に、或時修辭法の輕む

すべからざるを説くに及むで。

『たとへば山は高く水は流るといふのみでは、一向に人の美感を

惹起さしめない、されど、山は巖々として聳え水は……』

と力味むだが、次の句が續かず生憎停電して仕舞つたので氏は大

にへこたれて、頭から湯氣を立たせながらヤツと考へ付いて。

「水はリウ／＼として流ると云ふ風に修飾しなくては可かない」と遣つて除けて漸く溜飲を下げて仕舞つたと云ふ珍談もある。

■坪野氏の大々の氣焔

現時東京高等商業の校長をして居る坪野平太郎氏は、嘗て領事をした事もあれば、理想的市長として神戸市にゐた事もある、のみならず、銀行を經營しては大に其の手腕を財界に現はした事もある、氏が大學時代には添田壽一氏や、阪谷芳郎氏等と同じクラスで、氏は其頃將來の偉大なる外交官たるを自任してゐたと云ふ事である。

されば、其の大學時代の怪焔氣焔は當る可からざるものがあつて所謂意氣衝天と云ふ勢であつた、或時氏等の同窓が會合して向島邊で宴會を催する事があつたので、同窓から談判員を派出して向島の料理店に交渉させたが、其頃一般の學生の氣風といふものが亂暴であつたから、何處の料理店でも體よく斷つて仕舞つた。

談判員は何れもシケ込むで歸つたので、同窓は將來の外交官を以て任ずる氏を正使とし井上圓了氏を副使として更に交渉せしむる事と成つた。

スルト、氏は井上氏と共に向島の植半に繰り込むで。

『明日此處に我々が寄るから是非よろしく頼む！』

と語つたが、植半でも言を左右に托して、容易に之を引受ける氣色が見えない、スルト、氏は女主人に直談判して。

『婆さん！ 能く考へて見たまへ！ 我々は今日でこそ學生で居

るが、近き將來に於ては我々の中から大臣や、ド偉い外交官な

どがドシ／＼出るぞ！ 言は、大臣の卵と云ふ可きもの、宴

會を斷るとあつては植半の面目にも懸るぢやあないか……』

と滔々と述べ去ると、女主人は微笑むで遂に之を承諾した。

そこで、氏と井上氏とは凱歌を擧げて歸つて來ると、一同は吉左

右を案じて、

『また駄目か？』

と訊くと、井上氏は側から。

『大成功ぢや、坪野が偉い事を言つて植半の女將を納得させたぞ

流石は將來外交官の手腕は凄いものだ！』

かくて、其の翌日之等一團の學生が植半に繰り込む日は恰も雨

天で、常ならば日曜の事とて墨堤は人の山を築くのであつたが、此

日は植半のみ獨り賑やかで會合を斷つた他の料理店には一切客がな

く極めて淋しかつたから、坪野氏は植半の女主人に向ひて。

『何うだ、大臣の卵の宴會を納得すると雨の日だつて此通りだか
ら……………』

■成瀬子爵と焼芋事件

固は尾張犬山藩主の子息で、目下麴町區下六番町に同勞社といふ
印刷所を以つて、一面名古屋に陶磁器の店を有つて居る子爵成瀬正
雄氏は極めて平民的人で、華族社會にはめづらしい人物である。
嘗て犬山出身者と會合した時の餘興に、抽籤に書いたものを買ひ
に行くといふ約束で、氏は其の抽籤を取ると、焼芋二錢といふ名譽

の使節に當つた、スルト、氏は潔く。

『有難く名譽な使節を仰せ付かつたよし買つて來る！』

と言つて、約束の如く芋を買つて來たといふ逸談がある、一事が
萬事恂う云ふ筆鋒で極めて平民的なる態度で職工をも勞ると云ふ事
だ。

■目賀田男の選舉批評

勝海舟の婿君として政治家として知られたる、貴族院議員目賀田
種太郎氏は、例の謹嚴な態度で議員選舉を批評して。

『衆議院議員の選舉には何うして彼んなに金が懸かるのだらう？
また候補者は何うして彼様に金が惜氣なく使へるのだらう？
金の上から云ふと、今の衆議院議員は全く貴族同様だ！』
と語つた事がある、流石謹嚴篤實なる人物だけに其の評語が串戯
の中にも面白味がある。

■尾崎夫人と婦人釋放

學堂尾崎行雄氏の夫人テオドラ女史は、其の良人が市長職を辭し
た時に

『これから良人は好きな政界のみに立つのですから、私は實に喜
むで居ります、しかし、私は始めて政治家としての妻となるの
ですから、勝手が解らぬながらも新らしい心持になりました』
と語つた、尙夫人は其の將來の事業として、英國の婦人釋放組合
の支社を日本に設けて、密航婦や、或は淪落に沈まむとする婦人を
救ひ出だすに努力せむと志して居るさうである。

■田中夫人と總菜準備

海洋學に熱心なる子爵田中阿歌麻呂氏の夫人竹子の君は、誰も知

る如く御歌所長たりし故高崎正風の二女で、流石は父翁の感化を受けて嘗ては歌道に秀でて其名を現はしたものであるが、一旦子爵に嫁いで以來、近頃一向に其歌を見た事がない、それは子爵が、『歌など作ることは眞平御免だ！ 其暇に日々の總菜の事でも考へて呉れた方が善い！』と命じたからちや相だ。

■上原將軍と毛生藥

増師問題で昨年大に花を咲かせた陸相上原勇作氏は、まだお年の

三十代の時からお頭がピカ／＼と光つてゐたから、夫人はシタ、か氣を揉むで毛生藥や何かを使用する事をすゝめたが、一向に利目がなかつた、スルト、氏は平常夫人を慰めて。

『其様な事を心配するものぢやあない！ 下らないぢやあ無いか頭が禿げなくては逆も大臣に成る資格はないぞ！』

■松田正久氏の不得要領

政友會の一領袖たる松田正久氏は不得要領といふ評判があるが、然かも不得要領の中に大に要領を得て居る所がある。氏の口から輕

く。

『それも、然うだね！』

と出られると、中々に込み入った悶着も容易に解決するのみならず、如何に火のやうに眞赤に成つて居る連中も、此の一種人をチャームする力には熱を冷まして仕舞ふといふ事である。

かつて、或る地方問題で黨員が互に相争つて盛んに火花を散らし、雙方の代表者が氏を訪ふて交々其の意見を述べて、氏の決裁を仰がうとする。氏は、例の軽い調子で雙方に對して。

『はあ、其れも善ささうだねッ』

と答へるので、一向に要領を得ない、雙方の代表者は度々足を運んで其の裁決を仰ぐと、また

『其れも善からう！』

と語るのみで、果ては雙方とも待ち倦むで、問題はトウ／＼立消に成つたといふ事だ。

また同會の代議士で或る事件に就いて討議の起つた際に、氏は會長として討議の際は居睡をしてゐた、應て採決する時に成つて、甲者が多數なりしに拘らず乙者を多數と告げたので、異議が起つて、

『議長は俯伏に成つてゐて何うして頭数が解りますか！』

と皮肉ると、氏は平然と

『足音で解ります！』

とタツタ一言いつたのみだが、流石は、そこが、氏だけで、笑の中に甘く収まりを附けたと云ふ事だ。

また、氏は非常の碁好で、或年正月の三日に夜の一二時過までも黑白を闘はしてゐたが果ては夢中に成つて天明まで遣り通した。恰も其頃司法大臣であつたから、四日の政治始に出勤しなければ成らぬ所から、盛装して立廻りまで出掛けると、ウ、ンと氣絶して仕舞つた、變を聞いて懇意な醫者が駆け付けて、こゝを瀬と

「だから徹宵の圍碁はお止め申して居るでは有りませぬか」

と言へば、氏は

「だつて君は好きなものは然う人間の害に成らぬと言つたぢやあないか」

とシツペイ返しをしたので、醫師は呆れ返つて

「さう云ふ滅茶なロヂックを振り舞はされるから困ります！」

■中島行孝翁の奇言

衆議院議員中島行孝氏は、お年は取つて八十餘歳でも、中々の元

氣で、體量は驚く勿れ十六貫目もある、氏は非常の信心家で、物事に屈托しない、客と話してゐても眠氣が催すぞ。

『一寸失敬する、あまり眠いから！』

と言つて横に成るが最後、鼾聲雷の如しといった様な流儀で、かく無頓着で一面には悟つた所があるやうだ、また長壽の一法として。

『太閤秀吉は中々の精力家だが、あまり女色に溺れたから早死した！』

と語つて、長壽の一法は女色を謹むべきにありと斷じて居る、當

節の自然主義流行の社會には慥かに毛色の變はつた人物ぢや。

中村博士の大衆碁

林學博士といふ肩書を持つて、一時は大に政界に鳴らした中村彌六氏、其の圍碁を修行した時節に、碁の先生が鹿爪らしい顔で。

『貴君は其様な滅茶な置き方をなさるから可けない！ 斯ういふ場合には、恚う出て恚う置いて往かなければ駄目です！』

と白黒の石を取つて丁寧指南すると、氏は之をモドカしがつて『だつて私が置いて往つて居るのですから教はらなくとも同じ力

です！』

と負けぬ氣に言ひ張つてゐたから、碁師も、流石に手古摺つて。

『中村さんの様にあゝ剛情では逆も進みツこは無いさ』

と零ぼしてゐたと云ふ事だ、また、氏は或時怪氣焰を吐いて。

『人間が借金を苦にするやうなケチな考では駄目さ、我輩などは高利貸から借りて銀行に預けると云ふ藝當を遣つて居る、利子は損だが、エヘン、信用が大事だからな』

■板倉代議士の赤毛布

政界の名物男板倉中氏、俳名は春峯と申す方、時々興に乗じて面白い句を唸り出す事がある、何日ぞやも首相の議會演説を評して。

雪どけや、墓も出て鳴く、暖かみ

と口吟むだ事がある、斯かる風流な君に似ず面白い赤毛布がある先年米國に出懸けた時に、或る宴會で隣席の客の料理まで喰つて、其客から素破ぬかれて宗匠大にへこまされた事がある。

■和田垣博士の洒落方

法學博士の和田垣謙三氏の逸話はウンとある、或時英語演説の終

りに、次席の堀切辯士を紹介する時。

「ネキスト、スピーカー、ウイル、ビー、ミスター、ホリキリ、マイ、スピーチ、イズ、コレキリ」
と遣つてドツと満堂を笑はせた。

■古在博士の棕犬帽子

農事試験場の場長、かつは、農科大学長で、農學博士の古在由直氏は學者肌の人で風采なぞには頓とお構がない、現在の御使用の帽子は十年前獨逸留學時代のものだと云ふ事だ、髪も二月にならうが

三月に成らうが容易に刈らないが、氣が向くと、西ヶ原あたりの汚い床屋に入つて、ポケットから銀貨でも銅貨でも一つかみにして置いて来る、篤學の一風變つた人物だ。

■湯本氏文相をへこます

教育界の先覺湯本武比古氏がまだ高等師範を出でてチャキ／＼の御時節に文部省に出仕して、小學教科書の編輯を命せられて、氏は晝夜の別なく、熱心に編輯に従事して二三ヶ月を経過して、兎も角も出來上つて、之を時の文相森有禮に示すと、文相は一目見て

『これに幾日かゝつたか』

と云ふ挨拶、氏は有りのまゝに。

『二ヶ月許を要しました!』

と答へた、スルト、森は一言の下に。

『おれなら一晩に拵らへる、馬鹿々々しい此様なものに二ヶ月も懸つたのか』

と權もホロ、の挨拶、流石湯本も耐らへ兼ねて。

『閣下それは如何にも酷い申分です、實は斯くくの次第で……』

と一々其の編纂に費した苦心の程を語ると、凝ツと聞いてゐた森は流石に二ヶ月をも要する理由を知つて、痛く湯本の勞を慰むると共に、爾來氏に尠からず目を懸ける事となつたと云ふ事だ。

■松村博士の御分別

理學博士の松村任三氏は至つて眞面目な學者で、植物學に極めて熱心であるが、氏の教授の立案などは大抵廁中で案出せらるゝ者じや相だ、之に就いて氏の言草が面白い。

『一體家の中では家事とか何んとか種々の事で頭腦を使はなけれ

ば成らぬから、物の案を立てるといふ事は兎角さまたげられるが、廁中は浮世離れた別天地であるから、物事を考へ出だすに以て來いの場所だ！』

古來、物を考へるには枕上、馬上、廁上といふ事があるが、氏のも矢張此の流義と見える。

■中村畫伯の畫室

和洋いづれの畫にも新機軸を出だせる中村不折氏の畫室には、雪舟の松に鳥の墨繪の畫が懸けてある、其の理由を聞くと

『此畫を見て居ると、八釜しい親が監視するやうでナグリ書きが出来ない！』

■嘉悦女史と世話女房

麴町に女子商業學校を設立して居る嘉悦孝子女史は教育主義の一としては。

『怒るな！ 働らけ』

と云ふ事を金科玉條として、朝は五時ごろから起きて生徒と共に教室を掃除し、冬でも冷水で雑巾がけを遣ると云ふ始末で、學校は

世話女房の養成を目的として居ると語つて居る。

■三浦將軍も流石閉口

子爵三浦梧樓氏と云ふよりは觀樹將軍と言つた方が通りの善い氏が、往年廣島の鎮臺司令長官をしてゐた頃に、長藩の舊友で、然かも、氏と同じく腕白黨の一人であつた白井小助と云ふ豪の者が、久々振に氏を尋ねて殊勝にも美事な菓子一折を贈呈した。

三浦は生憎此時には不在であつたが、歸宅後、白井の尋ねて來た事、殊に白井が菓子一折を土産として置き去りし事とを聞いて、笑

ひながら。

『年と云ふものは争へないものだ、白井も最う老ぼれて仕舞つたな、あの亂暴な男が、殊勝にも菓子置いて行くやうな優しい男に成つたか？』

と語つてゐたが、サテ月末に成ると、三浦が取り付けの菓子屋から來た書き付けには、白井が三浦邸に持ち込むだ土産まで、チャンと書き込むであつたから、流石の觀樹將軍も之には一杯喰はされて

『白井の元氣未だ衰へずと云ふべしだ！』
と苦笑したと云ふ事だ、此の白井小助こそ獨歩のモデルとした富

岡先生じや相だ。

■石黒翁の熱湯攻め

貴族院議員の石黒忠憲翁、海に千年、山に萬年の老功者じや、往年或る華族の三太夫先生が、氏が陸軍々醫總監をしてゐた頃に、或る華族の若君が徴兵適齡に成つたので、身體検査の七加減を願ひたさに、美事な鯉節の一折を石黒邸に持參して、其れとなく不合格に成る注文をかけた、スルト、氏は三太夫の來意を讀むで、

『其れは實に結構なお考へで御座る、取捨は固より検査官の意中

に在る事ですが、しかし、拙者も成る可く合格に成るやうに心添いたしませう、折角の御熱心な御希望で御座りますれば……

……』

と逆襲されたので、流石の三太夫先生も、二の句が續けず、熱湯攻に會つた心持で狐鼠々々と歸り去つた。

■三宅夫人の御名吟

閨秀作家として知られたる三宅雪嶺博士の夫人、花圃女史が其の十歳の時に口吟むた和歌に。

野中のなかにて、モシ夕立ゆふだちの、雨あめに會あは

道みちゆく人は、さぞこまるらん

と云いふのがある、流石さすが當今たうこん文壇ぶんだんに其名そのなを知らるゝ女史ぢよしも、此歌このうたを讀よむでは俯仰ふげう今昔こんじやくの感かんに堪たえないと思おもはれる。

■ 井上老侯いのうえらうこうの計畧けいりやく

内田山うちだやまの老侯らうこう井上馨いのかほるし氏が、其昔世そのむかしよは未だ舊幕きうばくの當時たうじ長崎ながさきにゐた時に、或日あるひ市中しちゆうで何處どこかの藩士はんしの刀かたなにブツかつたと云いふので、對手あひては非常ひじやうに寸腹りつぷくして、

「疎忽そこつにも程ほどがある！ 苟いやしくも兩刀りやうたうをさした貴殿きでん、武士ぶしでは御座ござら

ぬか、武士ぶしが疎忽そこつで他たの刀かたなに突懸ぶつかかるとは怪けしからぬ！」

と咎とがめ立たてるので、氏しは

「イヤ不調ふてう法怪はふけ我がで御座ござれば御寛宥ごくわんいうを」

と詫わびたが、對手あひての武士ぶしは中々なか／＼以て聞きかない、果はては、雙方さうほう共ともに男をとこらしく長崎ながさきの風頭山かざかみやまで果合はたしあひを遣やらうと云いふ事ことに成なつた。

かくて、二人ふたりは伴つれ立たつて風頭山かざかみやまに往ゆく道みちすがら、井上いのうえは心こゝろの中うちで

「此この野郎やらう、飛とむでも無ない所ところに糞力くそぢからを入いれる奴やつじや、下くだらない事こと

に命を捨てなくとも、目下の時節、御國に身命を捧ぐる幕は多い、一つ後學の爲に參らせて遣るも面白い！」
 と思つたものか、會々一酒樓の下を通りかゝつた時、愛嬌を振り蒔いて、

『時にお互は立派に果たし合ふのだから、兎に角、此の酒樓で一盞傾けて、其上で花々しく果合ふじやあないか』
 と語ると、對手は威丈高に成つて、其の心中では氏が憶氣出だして御馳走を振る舞ふ事と獨り合點して。

『其れも宜しからう……』

の挨拶で、二人は酒樓に上つて、對手はシコタマ詰め込むだが、宴酣にして氏はチヨイと樓下に下りて。

『會計は彼の方に……』

と言ひ残して、雲を霞と失敬して仕舞つた、スルト、對手の武士は此事を聞いて、所謂目眇裂けと云ふ格で、地駄太を踏むで
 『クツ、曲者取り逃がしたツ！』
 といふ臺詞を残す幕と成つた。

田中玉堂氏のト寢入

玉堂の雅號で、時々其の論文を發表する東京高等工業の田中喜一氏は、如何なる多忙な時でもチヨイと一ト寢入して懸ると云ふ事だ何か急の用事を頼むものがあると、快よく之を承諾し、客の歸つた後で床をのべてチヨイと一ト寢入する、或時に五時に開く宴會があつた、氏は學校を三時に退散して、三十分の時間をかけて自宅に歸つて、例の寢床を延べて一ト休みを遣つて、應て宴會に出懸けると云ふ始末、或人が何故其様な事をするかと聞くと、氏の言草が面白い。

「こうしないと折角の楽しい宴會に出かけても興味がない……」

北條時敬氏の大談判

新たに東北大學總長と成つた北條時敬氏は、理科大學時代には、山口銳之助、隈本有尙氏と鼎立して數學の三秀才と稱へられた人物だ、所が數學家に似ず一風變つた人物で、其の金澤の高等學校に校長をしてゐた頃に、故伊藤公が金澤地方を巡遊した事がある。

スルト、氏は自から書翰を認めて、然かも自から其れを伊藤公の旅館に持參して、此の御返事を戴き度いと迫つた、其の手紙の意味が面白い。

『閣下は日本のヒーローである、私は此地の高等學校長として、將來の日本を経営する青年の教育を擔當して居る、さるに、若し閣下が従來の其れの如く、此地に來つて、遊興を恣にせらるゝと、青年の風紀を害するから、何うか遊興を廢めて貰ひ度い、偏に教育の爲に固く願をいたす、何うか色よい御返事を承り度い！』

此の色善い御返事には、流石の伊藤公も急所を突かれて一本參つたと云ふ事である。

■ 有賀博士等の共和會

今の帝國大學が未だ開成學校と言はれてゐた頃には、何しろ新日本の創業時代の事として、學生間にも随分破天荒のものが多かつた。今日國際法の大家として知られて居る有賀長雄氏や數學家の藤澤利喜太郎博士や、隈本有尙氏や、早稻田の市島謙吉氏や、故奠南山田喜之助や、天下の記者たる故山田一郎や、故辯護士の岡山兼吉などの面々が、學友相互の親睦を圖ると云ふ理由と、一は討論演説の練習を遣ると云ふ名目の下に、共和會といふ結社を拵らへて盛んに

怪煙氣焰を吐いてゐた。

最初は會員も少數であつたが、次第に其數を増して來た、其數を増すと共に様々の意見が出て來て、いはゆる船頭多くして船が山に上りかゝる形勢と成つた。

何しろ負けじ魂の血氣盛りの剛の者の寄合と來て居るから、旋毛曲もあれば神經の過敏家もある、従つて思想も違へば感情も違ふ、果ては會員が二派に分かれて、謹直派は石に社衞を着けたやうな鹿爪らしい事を唱導する、一方の磊落派は之を嘲笑して放談もやれば大笑も遣り、風采態度には頓とお構がない。

スルト、或日謹直派の有賀長雄、隈本有尙、山田喜之助等の諸氏は會規の改革案を持ち出だして。

『以來は入會の手續を嚴重にして、會合の體裁や形式を整へて、集會の席上にては一切禁煙といふ制裁を定めやう！』
と發議した、磊落派の方では鼻の先で扱つて。

『煙草を集會の席上で喫むだつて、何も其れしきの事を咎めるにも及ぶまい、會規を嚴肅にしたり、體裁や形式を整へるなんて、さう石部金吉金兜にならなくツても善いぢやあ無いか。』
と答へて一向に改革意見を採用する氣色が無い。

謹直派の面々は之を聞いて青筋を立て、遂に磊落派の不眞面目を責めて、同派の二十餘名は連署して。

「近時我が共和會の弊、實に言ふに忍びざるものあり、慷慨以て慨すべし……」

と云ふやうな慷慨悲壯の文章を出だして脱會し、更に戊寅社といふものを組織して共和會と對立するに至つた、

恰も其頃G組では關直彦氏や、高田早苗氏などが晩成會といふものを組織して三分鼎立の狀を現出してゐたといふ事である、十年一夢どころか、今日よりは三昔にも近い、之等名士の今昔の感が、聯

想される。

■藤澤博士等の大騒ぎ

また之と同じ頃の事であつた磊落派の一驍將岡山兼吉に至つては能く寢言をいふ人物で、此の寢言の爲に屢々同窓の安眠を妨害する事があつた。

或夜更酣けて草木もシンと眠る眞夜中に、岡山等の寄宿寮に躁たしく

「泥棒ぢやあ、泥棒が……」

と絞るやうな聲を上げたので、同室にゐた藤澤氏や、市島謙吉氏や、隈本有尙氏などを始めとし、一騎當千の剛の者は、急に起き上つて、賊の所在を岡山に聞くと、岡山は鼾聲雷の如しと云ふ體たらく、流石の豪傑連も氣拔がして。

『また寢言か、冗談ぢやあないせ！』

と目をコスリながら再び寢床に入つて口々に。

『何んだ馬鹿々々しい！』

■ 玉利博士の飢饉論

農學博士の玉利喜造氏が先年盛岡の高等農林學校長として赴任した時に、盛岡の市民は非常に喜むで。

『玉利博士は有名な學者だから、屹度將來折に觸れて名論を聞く

事が出来る！』

と口々に語つて樂むでゐたが、サテ氏は赴任後、口を噤むで容易に其の蘊蓄を吐かないのみならず、會々吐くと。

『東北の地は必ず飢饉が襲來すると思はれる！』

と云ふのみであつた、流石市民も之には失望して、窃に飢饉博士と稱へて居た。

■夏目氏の奇抜な職業選擇

吾輩は猫で有名な夏目漱石氏の大學豫科にゐた頃は、水野練太郎氏や、正木直彦氏等と同クラスであつたが、漱石氏の亂暴と來たら非常なものであつた、表面は優しい顔をして猫を冠つて、然かも教壇の側にあるストーブに山の如くに石炭を焚き付けて、ストーブ嫌の漢學先生の禿頭に汗の出る様を見てクス／＼と笑つたり、或は數學の先生がポールドに向ひて、一生懸命に數學問題の解説に取りかゝつて居ると、氏はソツと其の後に往つて脊中に白墨で徒ら書きを

遣ると云ふ風で、煮ても焼いても食へない腕白者であつた。

斯ういふ調子だから學科の方は勢ひ二の町に成らざるを得ない、殊に試験間際に病氣に成つて缺席したので、其後に追試験を申し出たが、學校の方では何う云ふ譯か許さなかつた、流石氏も小首を傾けて。

『これは一つ困まつた！ 追試験をして呉れないのは、自分の成績が良くないから信用して呉れないのだらう、これでは今少し學問が出来なければ駄目だぞ！』

と觀念して、試験をしない缺席落第で、同じ學年を二度と學び返

へして、今度はいよいよ本氣に成つて有らゆる學科が好成績を現はすに至つた。

殊に理科や數學に秀で、ゐた所から、氏は豫科を了へて建築科に入學した、其の建築科を志願した理窟が流石に夏目式だ。

「おれは變人だ、これは世の中に容れられないから、變人に向くやうな仕事を選ばなければ成らぬ、土木建築といふ様な日常に缺く事の出来ない必要な仕事さへすれば、何も性來の變人を改むるにも及ばない！ 幾ら變人でも遣つて貰はなければ成らぬから、自づと他が頭を下げて頼みに來る、さうすれば、飯の食

ひ外づしは無い！」

と云ふのであつた、さるに、其後ある親友と物語つて、世界的の文豪となると云ふ決心で、今日の方面に向つたと云ふ事だ。

■ 藤村義朗氏の柔術

三井家に其人ありと知らるゝ華族の藤村義朗氏が、時は恰も明治十八年、其年十六歳で英國に留學した、當時は英國では未だ日本を詳かに知らない、のみならず、日本は支那の屬國の如くに思つてゐたので、彼國の青年學生が、氏を支那人だと思つて、寄つて集つ

て大に侮辱を加はへた事がある。

スルト、氏は始めて入學した日に二三の悪童を得意の柔術でへこまし附けたので、以來大に同窓の間に畏敬さるゝに至つた。

■坪内博士の花暦講

早稻田の重鎮、文學博士坪内雄藏氏が帝國大學にゐた頃は、例の共和會、晩成會、戊寅社の諸豪傑が鼎立してゐた時代であつたが、其後三者の罪の無い確執は次第に解けて、此の三派の中から、市島謙吉氏や、山田一郎氏や、岡山兼吉氏や、有賀長雄氏や、三崎龜之

助や、山田喜之助や、高田早苗氏や、坪内雄藏氏や、並に會外の添田壽一氏などが寄り集まつて、別に日本歴史に關する材料の研究を行ふ爲に月一會といふ者を組織して忠實研究してゐた事がある。

或春のこと、此の月一會の連中が、櫻花爛熳の時節に、向島に繰り出だして一日の花見をすると云ふ事に成つた、其の會名は坪内氏の命名で花暦講と云ふ優雅な名と成つた。

しかし、名は優雅でも元來が青年氣鋭の豪傑連の企てと來て居るから、其日の扮装と云ふものは珍妙奇抜なものであつた、中には焼芋を頬張つて、杵兵衛や、田吾作を氣取るものがあるかと思ふと一

方に手拭を冠ぶると云ふ者もあつて、宛然たるベランメー會であつた相じや。

■柴田氏と新聞記者

内閣書記官長をも、拓殖局の總裁をも勤めた柴田家門氏は、新聞記者の訪問を受けると、記者の質問に對していはゆる瓢箪に鯨式の返答をするのが常であるさうだ。

所が或る時、政界に某大臣の更迭説があつた時、一新聞の記者が早速氏を訪ふて、事の實否を尋ねると、氏は例の調子で。

『長い間には其様な事が無いとも言へまい！』

と答へた、スルト、氣早の記者先生、獨合點して、翌日の新聞に麗々と某大臣の親任式があると云ふ事を掲載した、之を見たる氏は其の新聞記者を電話口に呼むで。

『僕の話で君が彼の雑報を書いたのなら、貴紙の爲めに氣の毒じや、しかし、之は僕の罪では無い、君の早合點の罪だ、念の爲に申し置く！』

と遣つたと云ふ。

■三浦將軍の意氣込

觀樹將軍三浦梧樓氏が、其昔十六七歳の時に有名な奇兵隊にゐた時の事であつた。

陣中の無聊に時々書見して居ると、同隊の弘中なにかしと云ふ年上の壯年者が、常に其の腕力を恃むで同輩を侮り、傍若無人の振舞が多かつた。

或る日、弘中は三浦が無我夢中に讀書して居る側に往つて、之れを抑揄ひながら、切りに胴魔聲を振り上げて阿呆陀羅經を呻り出だ

して、其の書見を妨げやうとした、氏は平氣で弘中がまた例の人の嫌ふ事を始めたと思ひながら、左あらぬ體で書見を續けて居ると、弘中は稍々焦れ氣に成つて。

「梧樓、聞かないか、我輩の阿呆陀羅經を……」

と言つたが、負けぬ氣の三浦は一向に應じない、スルト、弘中は無法にも扇子を以て、三浦の頭を叩きながら益々阿呆陀羅經を呻り出すと云ふ始末、三浦も流石立腹して

「馬鹿者奴、取り合はないで居ると、ますます増長して我儘をする、馬鹿をしなないで早く歸れ！ さも無いと命は無いぞ！」

と詰ると、弘中はせ、ラ笑つて。

『生意氣な小僧兒、貴様が我が輩を斬ると云ふのか、豆腐を切るにも四文を拂はなければ成らぬ世の中だぞ！』

と口に任かせて言ひ度い放題を喋舌り立て、侮辱するので、當時の時節柄として法廷に持ち出だす事も出来ない、三浦は蹴起して三尺の秋水を抜き放つと、弘中は其の意氣にへこたれて、逃げて仕舞つた。

が、利かぬ氣の三浦は承知しない、其後を追うて弘中に追及し、弘中の一命は、あはれ今や風前の燈火と同様に成つた。

此の時たまく三浦を制止する者があつたので、弘中は九死に一生を得たが、遂に奇兵隊を除隊されて、三浦は賞賜さるゝ事と成つた。

弘中は其過を悔みて氏に謝罪し、爾來交を結ぶ事と成つて、後年弘中の没した後に、氏は其の遺孤の爲に、學資を給與してやつたと云ふ。

■芳賀博士の立小便

酒好でまた一向に風采に無頓着な、文學博士の芳賀矢一氏は、時

々風呂屋から歸りに魚屋によつて、甘さうな切身を竹の皮に包むで買つて歸ると云ふ風で、何日ぞやも色の剥げた木綿羽織に古い小倉袴を穿いて、江の島の一旅館に泊まると、あまりの風體に賣卜者と見られて、四疊半のケチな一室に通うされたさうだ、酒は日本酒では利かぬ所からウイスキーを遣ると云ふ風で、或る時は交番の前で立小便を遣つて科料を取られた事がある。

■山本伯の亂暴時代

今の首相山本權兵衛氏の未だ海軍兵學寮の學生であつた頃は、キ

ツイ亂暴を働いたもので、或時當時の中牟田寮長が生徒の排泄物を賣却した金の始末に困まつて、其の頃會計制度の確定しない時代此の不潔物の金は何うして善いのか解らないと云ふ様な始末で、教師の慰勞宴會に之を使用する事と成つた。スルト、氏は之を聞いて同窓を引き連れて、其の酒宴の席に至り。

「寮長、今日の費用は何處から出ました、苟も我々の排泄物の金を教師のみで飲むといふ法は有りませぬ！」

と詰問すると、寮長は笑ひながら

「金を何うして良いか、其の始末に困つたから、茲に流用したの

「じゃ、其れを怒る事は無い、お前等も飲むが善い！」
と語つて、其席に來た學生一同にも振舞つたので、寮長は之が爲に尠からず自腹を切つたと云ふ事だ。

■添田博士の帽子取かへ

法學博士の添田壽一氏は田尻稻二郎氏から尠からず愛せらるゝので、日頃田尻博士が風采に頓着なしとは言ひ條、博士の帽子の餘り羊羹色に成つて、然かも、破れて居るのを氣にして、新調の帽子を博士に送くると、博士は例の調子で之を斥けて仕舞つた。

スルト、氏は博士邸に出懸けて、態ど新調の帽子と博士の古帽子とを間違えて、自宅に冠り歸つて、其の古帽子を床に飾つて、これを恩師と思つて日々感謝して居ると云ふ事だ。

■福澤桃介氏の逸談

新代議士の福澤桃介氏は中々の事業家で、今日の資産は實に尠からざるものだ、福澤諭吉翁の女婿で、其昔炭鑛會社にゐた頃に病氣の爲に入院したが、或る人が興信所に氏の信用を問合はせると、興信所は其の信用の全くゼロなる事を報告した、黄金多からざれば

交り深からずとかや、氏は之を聞いて病床に涕泣し、痛切に人心の恃むべからざるを知り、爾來露骨の金溜主義の人と成つたと云ふ事である、日露戦役後の成金黨中に在りて、其の最後を完ふし事業界に活動せるは氏のみと云ふ事である、寫眞を取る事が嫌ひで、其の事務所には美男子を採用する事が好きと見える。

■西園寺侯の友誼

侯爵西園寺公望氏が、其の昔佛蘭西の巴里から歸朝した當時に東洋新聞といふものを起して、盛に自由民権の説を唱導してゐた頃に

事情があつて俄かに社長を廢めると言ひ出だした、スルト、天下の奇俠兒中江兆民などは大反對で。

『それは怪しからぬ、お互ひ同志が堅く誓つて遣り出したものを今更廢めるとは合點が往かぬ、其の廢める事情を話して呉れ給へ！』

と迫ると氏は

『其の事情を話す事は許して呉れたまへ！』

と答へたが、兆民などは中々以て聞かないから止むを得ず

『其れなら話すが新聞に書いて呉れては困る！ 實は其筋の内意

であるから諸君と共に新聞に従事する譯に往かない、何卒僕の境遇も察して呉れたまへ！』

と語つたが、此の秘密の委細を信州の松澤久策が、一々新聞に素破抜を遣つた爲に、氏は非常に困らされたが、敢て之を怒らず、松澤の死ぬるまで其の世話をして之を可愛がつたと云ふ事がある。

また氏は味覺神經が非常に鋭敏な、先年歐州を漫遊した時に、羅馬法王の招待を受けて種々と珍らしい酒を出されて、一々之を味つて其の産地と製造の年とを言ひ當てたと云ふ事である。

■本多博士の説明ぶり

農科大學教授で、林學博士と云ふ肩書を持ち給ふ本多靜六氏、年に似合はず、若い金切聲と胴魔聲と打ち交せた様な聲色で面白い講義をする、例へば都會は生ける墓場なりと云ふ様な事から説き起して、煤煙の例を挙げたり、或は上野飛鳥山などの枯木の實例を挙げたりして、乾燥無味の統計を巧みに詩化する、服装に頓着しない人で紙よりの羽織紐を結び、十七錢位の下駄を穿いて平氣で何處へでも出掛けるさうだ。

■大石正己氏も大隈伯には参つた

大石正己氏が其昔東亞策なる書を著はして大外交家を以て自任してゐた頃、其著を大隈伯に呈し且つ面會を求めた事がある。

スルト、伯は半日許も應接室に待たせ置いて廳で出で來つて、氏の外交策を聞いて後に、一々これを論駁した、氏は此の時伯に敬服して其後大隈黨の一人となつた、されど、之はうまく伯にシテ遣られたので、伯は氏の應接室に待つて居る間に、東亞策を讀み上げて反對意見を作つて其才を試みたのであつたが、其れが甘く大石を動

かしたのじやさうだ。

■松田代議士の無頓着

代議士の松田源治氏、近年三十八歳で始めて花嫁を迎へた、氏が江原素六翁の宅で見合をする前に、一友人が

『君は日頃無頓着じやが、苟も生涯の固めをする今日だけは神妙にして居れ！』

と忠告したが、いよく新郎新婦の見合に成つても、中々神妙にして居らなかつた、後に友人が

「あれ程言つて置いたのに何故大人しく爲なかつたのだ？」
と訊くと、氏の言草が面白い。

「笑はせて齒並を見たり、話させて聲を聞かなければ、木偶を見るやうで、一向見合には成らないじゃあ無いか」

■仙石貢氏の嚴談

有名なる仙石貢氏が、帝國大學が未だ開成學校と稱へられてゐた頃、其の卒業式に際して、一枚のボロ浴衣を着用して出席すると、時の東京日々新聞記者は之を見て、禮を解せざる者として大に筆誅

を加はへた、スルト、仙石氏等の同窓は聞き捨てならぬ、良い着物が無いから止むを得ず浴衣を着用したのだ、之を麗々と筆誅すると、は怪しからぬと意氣捲いて、果ては、千頭清臣等を東京日々新聞發行所に遣つて来て大々的嚴談を試み、遂に時の主筆たる福地源一郎をして謝罪的の論文を草せしめた事がある。

■岡部子爵の狂歌

前司法大臣の子爵岡部長職氏が、嘗て一之瀬函館控訴院長と、北海道の或る牧場を見物した時に、一之瀬氏が何氣なく子牛を撫で、

遣ると、母の牡牛は危害を加はへるものと思つて、角を振つて駆け寄つたから、一之瀬氏は驚いて妙な格好で逃げた、スルト、氏は吹き出して。

モウモウ、これはたまらぬ、モウモウ

連子の後家は、モウモ懲りく

と流石謹厚の士も即興を吟じて、一之瀬氏を笑はせた。

■桂公の縁談一件

前首相の桂太郎氏に對して故伊藤博文氏が文吉氏の爲めに、桂氏

の第三女を花嫁に貰ひ受くるために自から訪問して申し込むと、公爵は。

『其れは至極結構な御縁で申分はありませぬが、先づ相性が否かを見て貰ひました上で……』

と答へると、伊藤氏は言下に。

『其事なら御心配に及ばない、昨日高島氏に見て貰つた所が大々的の合性と吟味したから今日貰ひ受けに參つた次第じゃ！』
と語つたので、縁談は直ちに成立した。

■ 後藤男爵と板垣伯

男爵の後藤新平氏に關する逸話も亦尠くない、時は恰も明治十五年に板垣伯が岐阜で演說中に、圖らずも刺客に傷つけられた時に國定知事は時の愛知病院長たる後藤新平を慰問使として板垣伯の所に遣つた、スルト、伯は後藤氏が高野長英の親類たる事を聞いて。

「其れは面白い！ お前は後に立派な政治家になる！」
と語つた。

■ 小此木氏の皮肉

醫界の小此木信六郎氏は時々悪口を言つて人を揶揄ふ、何日ぞや板垣伯が氏に齒の調製を頼むと、氏は言下に

「貴下のやうな年寄の入齒は駄目です！」

と答へた、スルト、伯は流石負けじと

「我輩は年取つても盛んじや、此間も子供が出来たと遣ると、氏は透かさず。

「女の事と頭は、違ふ人は頭から先づ耄碌する！」

と遣つたので、流石板垣伯も微笑するのみであつた相だ。

■松井茂氏の御失策

今は何處かの縣知事をして居る松井茂氏が、其昔香川縣の警部長をしてゐた頃に高松に赴いて、或る富豪に招かれて抹茶の席に列つて、然かも其の上席に推されたが、流石の豪傑も之には閉口した、しかし、知らぬと云ふのも變だと思つたものか、先づ鶏の形をした一個の菓子を取つて其の半分を頬張つて、一椀の茶をグツと一息に飲むだ、しかし、鶏の残りの半分を何うして善いのか薩張り勝手に

■池野博士の御疎忽

が解らないから、其儘ポケットに捻ぢ込むで歸つた、爾來、鶏の半殺しさんと云ふ綽名が通用するやうに成つた。

農科大學に其人ありと知られたる博士の池野成一郎氏は、有名な疎忽屋で、或日の夕間ぐれ、農科大學からテク〜と歸つて来る道すがら、フト電信柱にブツかつて。

『イヤ失敬、々々』

と一言の挨拶を残して行く様を、後から凝つと見てゐた同大學の

意地わる先生が、翌日晝食の時に成つて、

「池野君の疎忽にも困る！ 僕は昨夕ひどく打突かれて、今に痛

くツて堪らない！」

と遣ると、氏は眞面目に成つて。

「イヤ、其れは失敬ツ、君でしたか」

■ 棚橋女史の元氣

女流教育家の棚橋絢子さん、女子教育にたづさはつたのは其年二十一年の時であつた、三十年間、失明の良人を助けて、種々と苦勞し

たるに拘らず、女史は之を左程に苦痛と思はず、人に向つて、

「私は苦勞をしましたが、しかし、其の苦勞をさほどに苦勞と思

ひませんでした、言はゞ、苦勞が上すべりをした形です、大變

得な性分です………」

なご、語つた事があるさうだ、頭腦明晰で、年は取つてもなかなか元氣な婦人である。

■ 高橋男の大失策

今の藏相の高橋是清氏が其昔特許局長をしてゐた頃には、特許

制度に新紀元を開らいて非常に評判も善かつたが、其後ふとした事から非常の大失敗をした事がある。

事の起りは明治二十一年頃にヘーレン博士といふ英國の技師が日本に来てゐたが、同國の鑛山業者から頼まれて秘露某山の銀塊を我が一二の實業家に示して、此の銀山を掘つてシコタコ儲けやうぢやあないかと云ふ相談をした、恰も其頃我國では南米移民の計畫もあつたのみならず、其の銀塊を分析して見ると非常に良好で、殊に寶石も混じつてゐたので、愈々大仕掛の銀山會社を起す事となつて、移民を行ふの傍ら外人と共同の銀山開掘業を始めると云ふ段取にな

つた。

スルト、多數の關係者の希望で、或人から氏に交渉すると、氏も大仕掛な仕事で、官吏生活よりは花も實もあつて面白いものと思つたものか、官を辭して其の經營の主腦者と成つて秘露に赴いた。

かくて、銀山に上つて探查すると、山は既に掘り枯らしたカスで目も當てられない状態であつた。流石の氏も大に驚いて立腹したが今更契約後の事として致し方が無い、成るべく穩やかに解約しやうと思つて、其旨を外人に話すど、外人側では最初から、嵌めて懸る積りであつたから、契約通りに破約する方から違約金として五十萬圓

を出ださなければ承知しない、のみならず、南米ゴロをそゝのかし
て脅迫らしい事をするので、流石の氏も閉口して三四ヶ月もかゝつ
て漸く談判を結了して、二十萬圓許を出だして僅に事件を落着せし
めたが、人夫を伴つて往つた費用や、滞在費や、何かを合はせると
百萬圓以上の損害に成つた。

かくて、氏は大に面目を損じて歸朝すると、銀山を有利の如く説
き廻はつた連中は、慘酷にも自己の不義を蔽ふが爲に、悪徳新聞記
者を買収して、氏を中傷してアベコベに攻撃したので、氏は奇禍を
買ふて一時は小石川の久堅町あたりに三圓許の裏長屋を借りてミジ

メな生活をしてゐた事があつた相だ。

■大木伯の華族論

貴族院の名物男、伯爵大木遠吉氏は、時々其の氣拔な議論を發表
する、嘗て貴族非世襲論を唱へて。

「よく調べて見ると貴族と稱する者の中にも如何はしい人物があ
る、貴族は通例世襲になつて居るが、之は抑々の間違で、世襲
と言へば天地と共に窮りなしと云ふ事になる、我輩は絶対に反
對である、日本には昔から其様な貴族はなかつた筈で、これは

支那の舶來である、我等の考では、貴族の遞減法を取つて、代を經るに従つて次第に爵を下げるのが一番に善いと思ふ、さうすれば、三四代も經つ中に最初の貴族は大概消えて仕舞ふ、其間にまた偉勳者が現はれると、其れにまた爵を授ける、かくすれば、貴族の淘汰も行はれて、眞に實價あるものゝみが、相當の爵に在るやうに成るだらう……』

と云ふ様な事を叙べて居る、板垣伯の華族一代制論に比較して、其の平民的態度を思はせる人物だ。

■大隈伯と大石氏との座談

大隈さんの長廣舌と來たら誰も知らぬ者はない、數多の客を應接間に通らして、チヨウウ〜ハツシと座談をして一向に屈撓しない、其れも其筈、喋舌る事は三度の飯より好きだ、伯と大石入道正己の君と對談する時は、餘ッほど面白い相だ、兩人共に兩手を振り翳して夢中に成つて、相手を制しながら自分ばかり喋舌らうとするので、容易に見られぬ圖を演ずるといふ事じや。

■内藤鳴雪翁の寢讀

かつては文部書記官をして、後に俳壇に隠れて、故正岡子規と共に新派の驍將と稱へらるゝに至つた内藤鳴雪翁は、漢學に於ては正岡子規の先生であつたが、俳句に於ては其のお弟子と云ふ格で、固とは舊松山藩の學生監督で、子規も、虚子も皆翁の監督の下に各學校に通學してゐたものじや相だ、さるに、子規の俳壇に旗幟を擧ぐるに及んで、翁も釣り込まれて此の方面に興味を有するに至つたので、俳壇の形勢が何う變らうが、翁はそんな事には頓とお構なく

『俳句は美を歌ふものである』

といふ簡單明瞭なるロジックを振り舞はして、此の一本鎗を突き通して居る、至極面白い人物で、身体を加減で、讀書するには必ず寢轉むで讀む、従つて書肆が如何なる丹精を凝らしたクロス製の製本でも、翁の手に懸つたら最後、寢轉むで讀むのに厚表紙では不便利などいふ處から、メリ／＼と破り取られて仕舞ふといふ事だ。

■林田翰長等の大氣焔

粹翰長と稱へられて其實蠻殼黨の一人たる林田龜太郎氏が、帝國

大學にゐた頃には、同級生に一木喜徳郎氏、内田康哉氏、早川千吉郎氏、林權助氏、町田忠治氏、鈴木馬左也氏、故稻垣滿次郎等一騎當千の豪傑揃で、氣焰萬丈當る可からざるの概があつた。

のみならず、一同の成績は優良で、餘り書籍にカチリ付いてゐた方では無かつたさうだ、殊に品行も善いと來て蕎麥屋に陣取つて腹鼓を打つ位が關の山であつた、流石教授連も感心して。

『善くも揃つたクラスじゃ、近頃以て珍らしい……』

と譽めチギつてゐたと云ふ事である。所が之等の諸豪傑、苟も巫山戯た眞似は爲なかつたが、當時寄り集まると、學校卒業後に於る

天下取の相談に餘念がなかつた。

『外交の方面は誰れ！ 財政方面は誰れ！ 内治は誰れ！ これ

ならば美事に天下は取れるぞ！』

と大氣焰を吐いてゐた相だが、爾來二十有餘年を経たる今日之等の人物が一角に其の盛名を博するに立ち至つたのはまた好話柄と言はざるを得ない。

澤柳總長の腕白

新らたに西京大學の總長と成つた澤柳政太郎氏の少年時代と來た

ら煮ても焼いても喰へない腕白者であつた。

信州の郷里に稻荷神社があつたが、此の神社に参詣するものは非常に夥たしい、従つて油揚は非常に多く供へられるのであつたが何日の頃よりか、其の澤山に供へられてある油揚が見る／＼無くなつて來るので、神社に關係せる人達は不思議に思つて。

『一體何うして油揚が無くなるのだらう？』

と語ると、之を聞く者もまた不思議に感じて、其の原因が容易に解らない、一日と経ち二日と経つても、供へるに従つて油揚は何時の間にか無くなると云ふ次第、果ては、

『狐が喰つて歸つてゐつたよ！』

と、如何にも見たらしく噂する者もあつたが、其後仔細に様子を伺つて居ると、其の油揚の無くなつたのは、此地の少年の一團が之を盗み取つて何處にか持ち去つて喰ふのであつた、然かも、其の餓鬼大將が氏であつたとは驚かざるを得ない。

■大隈伯と福澤翁との喧嘩

明治の初年に於ては大隈重信氏と福澤諭吉翁とは、殆んど犬と猿との間の様であつた、翁が氏の爲す所を見て。

『大隈などの爲る事は愚に付かない事ばかりだ！』
と冷やかすと一方大隈の方では、

『何んの福澤の様な迂儒輩に我が輩の爲る事が解るものか？』
と言ると云ふ風であつた、スルト、或る物數奇の男が、官界の切
役者たる大隈氏と民間のヒーローたる福澤翁と面談させて喧嘩をさ
せ様と思つて、薩摩出身の一豪傑の家に此の二人者を落合はさせる
事とした。

二人者は固より其の計畫の有る事とは知らない、偶然にも相會し
て互に談論して見ると、互に意見は能く一致してゐたので、

『其れでは將來喧嘩は廢さうではないか、お互に歩調を共にして
進もう！』
と肝膽相照らして頗る親密に成つて、福翁門下の俊才は大隈の幕
下に馳せて共に政治的運動を試むるやうに成つた。

石川半山氏の樂天觀

山路愛山、茅原華山と並べて、壯年操觚界の三山と稱せらるゝ石
川半山氏が、其昔慶應義塾を出で、福澤翁に就職口を頼むた時に、
翁は固より氏の才を愛してゐたので相當の職業に嵌める事に決めて

居ると、氏はまた其後に長文の論文を認めて、

『我輩をして相當の位置に据ゑ給はらば努力を盡くして驚天動地の活劇を演じまする！』

と云ふ様な怪焰氣焰を並べ立て、翁の手許に出だした、餘人ならば兎も角、一代の人傑福澤翁其人に向つての此の氣焰は利かなかつた、翁は其の餘りに年少氣鋭の爲に前途の發達を阻害する者と思つて、之を教育する爲めか、兎に角此文を讀むでからバツタリと其の就職の世話を廢めて仕舞つたので、氏は折角前祝に友人と牛鍋をツツツいた興も覺めて仕舞つたといふ事がある。

氏はまた其人が餘りに樂天的なるだけに學識はあつても其の文章に深遠の趣は尠いが、折々半山一流の氣拔な文章を書いて人を笑はさせる、近頃も東京朝日に當世側面觀察の一部に、西洋崇拜の弊を片假名の時代として、

『演説でも單純な理窟ばかりでは、聽衆が謹聽しない、何んでも善いから少しく片假名を用ゐて聽衆を威嚇しなくては成らぬ。むかし、或る辯士が地方を遊説中、ドウも聽衆が喝采しないので、急に一策を案出し、西洋人の名前を臚列して初めて大喝采を博したといふ話がある。其の西洋人の名前も、急に作つたの

だから、眞正の人物で無くて、獨逸のビール氏は沸騰力の強い人物であつたとか、佛國過激黨の首領ブランデー將軍は猛威を揮ふたとか、英國のウキスキー氏の格言・米國の cocktails 氏の演説の一節などを引いたのだ、即ち各國の酒の名を取つて、其儘人物を造つてやつたのだが、何でも西洋人の名前には感服する國民だから、大喝采をして、此の辯士の演説は大當りであつたさうだ。

イヤ今の日本國民の缺點は、過度に西洋を崇拜する一點に在るので、悪い粗末な物でも、西洋舶來品と云へば高く買ひ、良い

物でも和製では人が取り合はない。

芝居にした所が、中村歌右衛門、市村羽左衛門の歌舞伎劇は天下一品で、我輩共に之を喜ぶが、一般の見物は之を有り難く思はず、何んでも片假名でなくては承知しない。

イブセン劇で候の、ゲーテ劇で御座るの、セイクスピア劇がドウだとか、片假名で書いてあれば、其筋が分らうが分るまいが役者が大根だらうが、舞臺は滅茶苦茶でも、一切頓着なく、大入り大當りであるとは實に不思議な世の中で、要するに、片假名が全盛の時代だ。

片假名が全盛の時代は西洋崇拜の時代で、半可通跋扈の時代だ
 利いた風のおツチヨコチヨイがノサバリ出でる時代だ、即ちイ
 クスカない時代、人を馬鹿にして居る時代、我輩側面黨をして
 臍に茶を沸かしむる時代だ。

日本國民が上下を通じてコンな變テコな氣風だから、對岸の米
 國人あたりが馬鹿にして排日問題などが持ち上るのだ』
 と云ふ様な諷刺氣拔の文を草したが、斯かる文章には天下一品の
 腕前を持つて居る。

■ 姉崎博士の示威運動

文學博士の姉崎正治氏が、笹川臨風氏や、佐々醒雪氏など、共に
 第三高等學校の學生であつた頃には、恰も西京同志社は其の全盛時
 代で、三高の青年學生は負けず、劣らず、學術や、運動を勵むだも
 のである。

其頃、同志社の生徒が時々三高の裏手の山の上に来て演説の稽古
 を遣ると、三高の學生等は裏の山の上で遣られるのを、如何にも自
 分等の範圍を侵害されるやうに思つて、氏等は毎朝起きると風氷る

冬の晨たると、紫雲棚引く未明たるとに論なく、同じく裏の山の上
 つて新聞の論説などを聲高々と朗讀して示威的に對抗するのであつ
 た、殊に其頃同志社は全盛時代であつたから、三高は端艇でもマツ
 チでも、野球でも、何時も負けると云ふ首尾であつたから、三高の
 方では忌々しく思つて奨励の結果、氏等の卒業後は三高の方が優勢
 に成つた。

■有吉忠一氏の尙武會

また同じく此頃の事であつた、有吉忠一人や、姉崎正治氏や、金

澤庄三郎氏や、笹川臨風氏などの三高同窓の間に尙武會といふもの
 を組織した。

會の目的は同窓相互の品行を監督して、若し不都合な行を演ずる
 者があると、遠慮なく制裁を加はへると云ふ規則で、怠惰で、學業
 を顧みず、遊興に耽り、或は校風に反すると云ふ者があると、ピシ
 くと譴責すると云ふ風であつたから、學生相互の品行も自から正
 しく成つて、元氣は溢れて、學力體格兩ながら秀づるに至つたと云
 ふ事である。

殊に其頃の校長は有名な折田彦市氏で、教頭は故松井直吉氏で、

英語教師には安廣伴一郎氏があつた、此の安廣氏の如きは、頓と其の風采に無頓着で、雨降りの日にはカラーの無い洋服に、靴を手に下げて、下駄を穿いて學校に遣つて來ると云ふ始末で其の格好は容易に見られぬ圖であつた。

■ 皮肉も上手な田尻博士

田尻博士は會計検査院長に就任して以來、今日に至るまで未だ嘗て夏季休暇を取つた事が無いと云ふ事である、そこで、人が其の理由を聞くと。

『狭く美しい自宅に居るよりは、検査院の方が建物は大きし、風通しは善し、どれ程に樂だか知れはしない！』
と語るので、部下に休むものがあるかと、氏は、
『君どころは餘程廣々とした好い家と見えるね』
と無邪氣な皮肉を並べ立てるので、流石部下も此の眞綿に針的の冷やかしには痛み入らざるを得ないさうだ。

■ 山川博士の硬骨

硬骨漢の好典型たる理學博士山川健次郎氏は、質實剛健の人物で

學生が印刷した名刺を持つて往くと、

『肉筆では其の姓名が書けないのか？』

と遣つ付けるので、學生もギャフンと參ると云ふ事である、また日本海の海戦の時に、世間では東郷大將の功蹟のみを賛へる嫌があつたが、氏は、

『東郷は大のデクの棒ちや、若しあれが會津の人であつたら警部に六ヶ敷い男ぢや、今度の戦勝は島村の功によるものだ』

と言つて、時の參謀長島村速雄氏の宅を訪ふて祝意を表して來たと云ふ。

■ 大食して娘を泣かしたる本多博士

林學博士の本多静六氏は其の少青年時代から深山溪谷を跋涉する事が好きであつた、其の學生時代に同志五六人と或る高山を探検して日暮に成つて山麓の一神官の家に宿泊する事と成つた。

スルト、神官の家では血氣盛りの若者の宿泊であるから、夕飯をウンと炊かせて夕餐を出だすと、終日山中を跋涉したる若黨は何れも餓虎の如く、喰ふの何のと云つて殆んどお話に成らない程に詰め込むだ。

之が爲に給仕役に出てゐた同家の愛嬢十四五歳なるは、殆んど給仕に疲るゝと云ふ有様で、若黨等はタラ腹食つて仕舞つて、中には帯を緩める者もあれば、中にはウンざりして横に成るものもあつたが、獨り氏のみは未だ物足らない顔付で、ムシヤ／＼と遣つてゐた。廳で最う一杯で廢さうと言ふ積りで、茶碗を差し出だすと、何うした譯か給仕役の娘はお盆を置いたなりに臺所に走つた、氏は例の頓狂聲をフリ立て、

『オホー、何うしたんだらう？』

と言ひつゝ、自からお櫃を寄せて盛らうとすると、お櫃は最う空

に成つてゐた、此時臺所で娘のシク／＼と泣く聲がするので其の仔細を聞くと、處女はお櫃の空に成つたのをハニかむで駈け出して泣いて居ると云ふ始末、若黨は異口同音に氏を責めて、

『本多が豚の様に餘り多く喰ふから此様な始末に成つたのだ！早く往つて詫びないか？』

と語つたので、氏は口を尖らしながら、處女の側に往つて、

『何うも失敬しました！餘り食ひ過ぎたものですから……』

とお詫したとは、中々以て振つて居る天下逸品の珍談だ。

■頑鐵將軍の頭を測量したる矧川氏

農學士志賀矧川氏が、其昔北海道の札幌農林學校の學生であつた頃、同じクラスには頑鐵將軍 早川鐵治氏もゐた。

早川氏は身の長け五尺八寸餘、頭禿げて藥罐に似たりと云ふ様一日共に土木學の講義を聞いてゐたが、餘り退屈に成つたので、矧川氏はヒヨイと背後を見ると、例の頑鐵氏が亦聞き倦むでスヤ〜と頭を光らかして眠つて御座るといふ始末。

スルト、矧川氏は直ちに鉛筆を執つて、其の禿頭を測量して禿の

中に鹿の子斑らに生えて居る薄毛の所を砂漠中の草原に譬へて、同級生に示すと、一同はクス〜と笑ひ出だしたので、土木の先生これを見て。

『志賀さん！ 教員室にお出でなさい！』

■ポストとレールとを取違へたる片岡氏

代議士の片岡直温氏、お年の若い頃には郷國の土佐で盛んに政談演説を遣つて、其の鐵道敷設の急務なるを鼓吹するに當つて、其の演説中に。

『先づポストを敷設して………ポストを延長して………』
 と、荐りにポスト／＼と叫ぶので、聴衆は呆氣に取られて、後に
 至りてポストとは何かと聞き質して見ると、ポストとはレールの間
 違ひであつた相だ、或る半可通が、ベストとベストとを取り違へて
 『諸君はベストを盡さなければ成りませぬ！』
 と叫むだのと好一對の珍談である。

■伯林市中を羽織袴で通したる中村博士

七博士の一人として知られたる法學博士中村進午氏が、先年獨逸

に留學を命ぜられて彼の地にゐた時の事である。
 氏は平常も羽織袴で學校にも往けば散歩にも出懸けると云ふ始末
 であつた。其の散歩に出懸ける時には、伯林市中の少年少女が物珍
 らしげに、氏の後を追うてドヤ／＼と来るから、當時氏と共に留學
 して居た友人は。

『中村君！ 頼むから此國で日本服の紋付羽織は廢して呉れ給へ
 あゝ子供に後を付けて來られちやあ見苦しくつて溜まつた者じ
 やあ無い！』
 と顔を擧めながら忠告したが、氏はこれを聞き入れないで、

「何、子供といふものは好奇心が強いから従いて来るのさ、日本だつて珍らしい人が来ると、子供が其後を付けて往くじやあ無いか」

と答へて済まし込むで居るので、友人は復たと言はず、氏はトウ
く日本服を着通して學業は好成绩を擧げて歸朝した。

■ 渡邊子爵の讀書癖

無邊俠禪、渡邊國武氏は其の少年時代から大の讀書家で、食膳に向ふ時にも、厠に入つた時にも、讀書すると云ふ有様であつた。

従つて、其の讀書好きから起つた種々の珍談があるが、其の養家に在りて、日々山林に薪を採りに出懸ける往復にも必書物を携へて之を讀むと云ふ有様であつた、所が或日山中で薪を拾ひ集めて、木の切株に腰打ち掛けて書見して居る中に、早くも日が暮れかゝつたので、氏は道を急いで自宅の前まで歸つて來ると、フト書物のみ持つて然かも薪を忘れて來たのに氣付いて、態々遠道を引き返へして薪を荷ひ返つたと云ふ奇談がある。

■ 桂公は大黒さんと綽名さる

桂氏に懇意なものは氏を呼ぶに大黒と言つて居るさうだ、其の理由は氏の顔がごことなく大黒様らしく福々して居るからじやさうだ
 大山公は嘗て、

『桂は馬に乗ると立派に見えるが、歩くと如何にも小さく見える』
 と語つたが、其れは其筈で、氏は胴以上は十分に發達して居るが其足は胴に比較して短かいからであるさうだ、昨年の政變に踏み止まる事の出来なかつたのは、全く此の足の短かゝつた爲だと云ふ者もある。

■ 井上代議士の辯舌ぶり

蟹甲將軍の稱ある井上角五郎氏、先頃豫算委員長では大味噲を付けたが、其の辯舌と來たら兎に角議會の名物男だ、流石の犬養木堂氏すら。

『角兵衛の口には迎も叶はぬ、あの流暢と皮肉とを並行させる腕前は天下第一品だ！』
 と褒める相だ、所が其の角兵衛氏はまた。

『犬養君には叶はぬが、武富時敏君や、島田三郎君には十分の勝

算を自信して居る』

云々と語つて居るさうだ、之も肝膽相照らすと云ふものだらう。

■江木衷氏の大氣燄

法學博士で、辯護士の江木衷氏が官吏生活をしてゐた頃の氣燄と意氣とは誠に以て珍らしい程の鐵骨で、其の逸事逸聞は珍らしくない程ある。

嘗て履歷書か何かを出だす時に、氏の年齢が記して無かつたから年齢を御記入成され度いと掛りの官吏が注意すると、

『俺は年齢を知らない？』

と氣拔な答をしたから、流石掛の者も閉口して、

『何年生まれですか？』

と聞く。

『其れが解らないのじや』

と更に答へた、掛官も怒るに怒られず、笑ふに笑はれず、

『でも御誕生が解らない事はありますまい！』

と突き込むと、氏は大喝一聲、

『馬鹿を言へ、誰だつて赤ん坊の時に自分の生まれた月日の慥か

に解る奴があるものか？』
と叫ぶと、掛官も煙に捲かれて朦朧として仕舞つた。

■雪嶺博士の鉛筆畫

現時の文豪雪嶺博士の帝大にゐた頃の學生々活と來たら珍無類で
其の風采の蠻殻はお話にならない、蓬のやうな頭に半風子を放ち飼
ひして、虱の巢だか。白微だか解らないムラが懸つて、一たび頭を
搔くと半風子が幾つとなく爪の間に入ると云ふ様なお構ひなしで、
寒中は足袋を穿かず、泥下駄を引きすつて教場に来ると云ふ始末、

天下の才媛花岡女史をして當時を見せしめたなら、

『あら何んで態てしやう！』

と叫ばざるを得なかつたであらう、此の風采態度に加ふるに例の
訥辯、變人の秀逸であつた。

また當時氏が垢で黒くなつた手に、一寸許の鉛筆をつまむで畫を
書くど、其畫が如何にも巧妙に出来るので、何かの天才であらうと
同人間に認められてゐたと云ふ事だ。

■志賀重昂氏と一車夫

雪嶺博士と並むで一時は大に文壇に盛名を馳せた志賀重昂氏、ツ
イ先頃信州長野に往つて、或る演説會に臨む時に、一車夫が、

『先生此頃はエらう大人しく成りやしたなあ』

と言ふので、氏は妙に思つて。

『お前！ 僕を知つて居るのか？』

と訊くと、車夫は鼻頭をユスつて、

『知つてますとも、先生が此の長野の中學校にお出の頃に、知事
さんの頭にビールをブツかけて大騒ぎした事があるじゃあ有り
ませんか？』

と二十年前の棚下ろしを遣らかしたので、流石の氏も聊か閉口の
體であつたさうだ。

■飯島魁氏と犬食會

今の理學博士の飯島魁氏が帝大の學生で、動物學を荐りに研究し
て居る時の事であつた。

或日刀を執つて一匹の犬を解剖して後に、同窓の加藤高明氏や、
嘉納治五郎氏等と謀議を凝らした結果、嘉納氏は其の狗肉を携帶し
て、滑稽上手の鹿島卯之吉氏と共に、白石直治氏を下宿に訪ふて、

『白石君！ けふ神戸から上等の肉を十斤ほど送つて呉れたから皆んなで喰はうじや無いか』

と語りつゝ、其の竹の皮づゝみを出だすと、白石は非常に喜むで、

『其れは有り難い！ 開いた口に牡丹餅じや！』

と答へつゝ、砂糖や、葱の準備に取り懸らせる、一方には嘉納が更に手紙を認めて同窓を呼び集める。

召に應じて馳せ参じた同窓の面々は、野村龍太郎、木戸孝正等皆一騎當千の健啖家で、下女は上に下にと奔走して、勢揃ひした頃に沸々と煮え出した。

何れも喉笛を呻らせて箸を附けると、神戸肉にしては不味い、中には。

『此の神戸肉は何んだか變じやぞ！』

と零すと、嘉納は、

『變な事があるものか、折角振る舞つて居るのに零されて溜るものか』

と答へたが。

『でも變なものは變だ、同じ御馳走に成るのなら最少しうまい奴が欲しい！』

と零ぼしながらも、トウ／＼美事に喰ひ平らげて仕舞った、スルト、嘉納は。

『不味い筈さ、實は牛肉じゃあ無いんだもの……』
野村や、木戸、白石等は驚いて、口々に、

『其れなら馬肉か』

『馬肉なら結構じゃが』

『エツ、猫か、鼠か、鼠か、犬か』

と口々に聞くと。

『實は今日飯島が解剖した狗ツコロさ！』

と本音を吐くと、中には嘔吐を催するものもあれば、

『いくら狗でも彼の位煮たのだから微菌も繁殖しない！』

と云ふものもあつた。

斯くて、其後四五日を経過して、狗肉を喰はされた連中は寄ると
觸ると。

『君どうだ、最うスツカリお腹から出て仕舞ったいらうか、酷い
事をする奴じゃ、何んでも、飯島と加藤とが發起人じゃつてよ』

■ 矢野恒太氏電報と綽名さる

我國に相互式生命保險を傳へたる人物として、且つは、ホケツト
 論語の作者として知られたる矢野恒太氏は、如何にも石部金吉金兜
 流の四角四面屋のやうに思はれるが、其實一面には藝者論を草する
 程の通人で、待合の玄關に立つて、ダシヌケに。

『電報!』

と叫むで、女中の慌て、出て来る様を見て喜ぶ癖があるので、花
 柳界では電報と云ふ綽名を得るやうに成つた。

■大隈伯邸内で妖怪學論

かつては天誅組の一人として、紫の打紐で大髻を束ね長刀を横た
 へた快男兒北畠治房氏が、今から一と昔大隈伯邸に朝野の名士二十
 四名と共に招かれた事がある。宴始まつて大隈伯は列座の面々を顧
 みて、

『數年前に自分が築地に住むでゐた頃に、隣家に伊藤博文がゐた
 が、聞くと伊藤は此家に移るや否や、家僕に命じて家の後にあ
 つた狐穴を塞がせて仕舞つたさうだ、スルト、其の家僕と云ふ
 のは、固とは京都の者で、東京に来てから二三ヶ月も経たない
 男なのに、其れから狐憑と成つて、能く見ず知らずの東京の名

所などを詳しく話すやうに成つたと云ふ事じやが、之は果して狐の仕業であらうか。』

と妖怪學の質問を放つと、座にゐた福澤諭吉翁が笑つて。

『何の其れは全く神經作用じや』

と言下に解決すると、福地櫻痴も亦之に賛成した、スルト、北畠

治房氏は之を聞いて。

『福澤君や福地君の説も御尤だが、しかし、僕にも説がある、諸君の説く所は實に通り一遍の偏理窟といふものだ、およそ世の中には知る可き事實と知る可からざる事實とがある、狐憑の如

きは知る可からざる事實じや、試みに康熙字典を見給へ！示偏の字は二百七十一字あるが、此の示偏の字は實に盡く解す可からざるの字である、一例を挙げると、福澤の福の字は示偏の字じやが、先づ福澤君が緒方塾にゐて米搗をしてゐた頃には貧澤諭吉であつた、世界國盡を賣つて五萬圓を儲くる事を當時に於て知る筈は無い、また福地の福の字は示偏であるが、然かも福地君が長崎から東京に飛び出だした頃は、貧地源一郎であつた、何ぞ當時に於て十行二十字詰一枚の原稿が十圓なる事を知らむや、之れ皆知る可からざるの事實である、示偏の字かくの

如く多きを見ても、其知る可からざる事實の多い事が解かる、されば、世の中に狐憑が無いとは言はれない、これは知る可からざるの事實である』
と滔々と異説を述べ立てたと云ふ事がある。

■永見勇吉氏の大雄辯

豊國銀行の支配人、永見勇吉氏が慶應義塾を出た當時には政界に一大飛躍を試みむとするの志望であつた相じや、其の時事新報社にわた頃に、衆議院議員の選挙があつて、例の有名な品川内相の選挙

干渉があつた、スルト、氏の親戚の或る候補者は改進黨に籍を置いてゐた爲に、其の干渉の餘沫を蒙る心配があつたので氏は品川子を訪ふて、午前の九時から午後の十時に至るまでの長時間、滔々と得意の雄辯を振つて選挙干渉の弊を論じ、遂に流石の品川子を動かしたと云ふ事じや。

■日向きん子さんの彈丸論

線の配合宜しとあつて人氣澤山の日向きん子さん、日向氏に嫁いだ當座は性來の文學思索に耽つて、頼んど世帯の方は忘れ勝であつ

たさうじやが、此頃に成つてヤツと世帯じみて來た相だ、夫人は、
かつて、

「娼妓は女子の大切な操を賣るのだから實に氣の毒で溜まらない
妾は鐵砲の彈丸と成つて是非とも此の惡弊を社會から驅逐した
いと思ひます！」

と語つた相じや。

■和田垣博士の奇問

法學博士和田垣謙三氏が嘗て農科大學で試験を遣つた時に、

「稻一本の穂には米幾粒ありや」

と云ふ奇問を發した事がある、スルト、一人の生徒は言下に、

「百四十九粒です！」

と答へた、氏は之を聞いて。

「私も然う思ひます！ しかし、君の百四十九粒説は何處から來
ました」

と聞くと、其の生徒は聲に應じて。

「粒の字を分析すると、米扁が八十八で、旁の立が六十一、合計
百四十九粒となります！」

と答へた、氏は聞いて大に感服の體で、さらに、全生徒に向ひて
 「只今某君の解答は實に要領を得て居る、試験とし言へば鹿爪らしい理窟だとのみ思ふのは間違つて居る、かうした頓智が無ければ駄目だ！」

と言つたさうだ、又嘗て外交官の試験の時に、

「綴字の一番に長い字は何か？」

と云ふ奇問を發した、スルト、對手は其答に行き悩むで居ると、氏は笑ひながら、

「其れは、スマイルスだよ、エスとエスとの間が一マイルもある

では無いか」

氏は時々こんな奇抜な問題を出して面喰はせる、中々以て面白い人物だ。

■ 徳富蘆花氏の無邪氣

先年綱島梁川の歿した時、其の葬儀式を壹岐殿坂の會堂に行ふたが、生憎當日雨天であつた、蘆花氏は其式に列る爲に徒歩して來たものと見えて、其の質素な羽織に泥が鹿の子斑らに附いてゐたが、夫子の無頓着は一向に之に氣が付かなかつたらしい。

斯くて、愈々式が濟むで青山に葬るに當つて、氏は亦列に従ふて徒歩して青山に往つたが、何しろ泥濘の中を歩むだ爲に、其足は土にまみれて汚く成つて仕舞つた。

スルト、氏は墓地の芝生の上に跣足に成つて、其の汚れた足を横に豎に草の上にナスリ附けて泥を落としてゐたと云ふ事である。蘆花の面影は此の子供らしい處にもアリ／＼と見える。

徳富蘇峯氏の洋杖

蘆花氏の阿兄たる徳富蘇峯氏のステツキ道樂は有名なもので、氏

の家を訪づれると、其の玄關の處に種々様々の洋杖がさしてある、日本製は勿論、外國製に至るまで、數十本とさし込まれてあるが、氏は之を交はる／＼用ふるのを、其の娛樂の一として居ると云ふ事で、其の珍書を多く蒐集して居ると好對比であるさうな。

山本達雄氏の投網

新農相山本達雄氏の投網と來たら有名なもので、奥平伯と共に雙美と稱へられて居る、其網に興味を持ち始めたのは、其のむかし日本銀行の總裁を廢めて鎌倉に引籠つてゐた頃に遣り始めて、今日で

は非常な上手で、網は大抵四尋半から五尋を打つが、一たび出掛ける時五百尾位は譯もなく取ると云ふ事である、浴衣がけに、腰篋笠姿でやる其の手際は、黒人も跣足で逃ると云ふ腕前であるさうな。

■縄暖簾をくゞる三浦子爵

三浦觀樹將軍の無頓着は有名なもので、其の熱海の別荘に居る時は、何日も百姓と一緒に成つて肥やしの擔ぎを遣る、其の東京に居る間は田舎の親爺の様な粗末な服装で、所々の縄暖簾をくゞつて、人夫や、職工と打交つて、隠居とか、おやぢとか、てめいとか言は

れて、之等を相手に機嫌よく飲むだり食つたりする。

■舊友を勞はる下岡翰長

先頃までは農商務省の農務局長をして、目下は新たに樞密院の書記官長と成つて居る下岡忠治氏は、時々面白い事を云ふ人物で、一面にまた友誼に厚い所がある、氏の青年時代の學友に今も薩摩の片田舎に燻ぶつて小學先生をして居る人がある。

スルト、氏は此の舊友の寂しい日を送つて居る心事に同情して、昔日の友誼を忘れず、二十餘年の久しき絶えず文通して、春夏秋冬

の見舞を怠らす、剩さへ、時々新刊書を送つて之を慰めて居ると云ふ事である。

■伊藤大八氏の大氣焔

政友會の伊藤大八氏が嘗て滿鐵の理事や、勸銀の總裁に擬せられた時に氏は人に向つて、

『僕が嘗て役人生活をしてゐた頃には犬塚大阪府知事や、小松遞信次官などは皆僕の部下で、殊に犬塚と來たら、其頃は學校出のホヤ／＼で理窟ばかり捏ねて生々しい所があつたから、僕は

種々ど意見を加はへたものだ、其の僕が大臣なら兎も角、今日滿鐵や勸銀の番頭や手代に成れるものか』
と大氣焔を吐いてゐた相ぢや。

■三菱現主人の逸事

父の彌太郎と叔父の彌之助との長所のみを併せて居ると稱せらるるが、其實大の腕力家で、殊に太ッ腹で、頭腦の明晰な平民的人物だ、嘗て其の所有の長崎造船所の職工が大ストライキを遣つて、

縣廳けんちやうや、警察けいさつでも、非常ひじやうに狼狽らうばいを極きまめたが、氏しは此報このほうに接せつして、落おち付き拂はらつて。

『打遣うちちやツて置おけ、手てを付つけるな、何どの位くらゐまで遣やるか思おもふ存分ぞんぶんに遣やらして見みたら善よからう！』

と電命でんめいしたと云いふ事ことだが、果はたして間まもなく職工しよくこうの方ほうから折せれて治をさまりが付ついた。

岩崎久彌いはさきくわい氏は斯かくの如ごとき人物じんぶつで、三菱ひしの三代將軍だいしやうぐんであるが、氏しに就ついて尙なほ面白おもしろい話はなしがある、其そは氏しが海外留學かいぐわいりうがくを了をへて歸朝きてうした當時たうじの事ことであつた、三菱家ひしけに縁えんある人々ひとぐが或ある宴會えんくわいを開ひらいた事ことがある、

スルト、其席そのせきに侍はべつてゐた紅裙連こうくんれんが、三菱ひしの子息しそくたる氏しに向むかつて

『何どうぞ、お見知り置おきを願ねがひまする！』

と、恭々うやくしく陳のべ立てると、氏しは改あらたまつて

『はい！、何どうぞ宜よろしく……………』

と眞面目まじめで語かたり出いづる態度たいどには、流石さすがの藝者連げいしやれんも避易へきえきして、二の句くが續つかなかつた。

■ 榊原子の福壽草

本郷區元町ほんごうくもとまちに居きよを占しめて居ゐる榊原子さかきばらしは非常ひじやうに園藝植物えんげいしよくぶつに興味しゆみを